

寺院名	應 曆 寺		寺院番号	㉑
所在地	大字大岩屋			
居住状態	有住		種 別	個 数
指定文化財	堂の迫磨崖仏（県史跡）	各種文化財 員 数	木 造 建 築	1
	應曆寺宝篋印塔（市有形）		礎 石 跡 等	1
	不動明王坐像（県有形）		石 造 物	7
	千手観音・不動明王立像（市有形）		仏 像	4
	阿弥陀如来坐像（市有形）		美 術 品	
	燈明像（市有形）		古 文 書	1
	應曆寺文書（市有形）		そ の 他	1
	應曆寺奥の院寄進札（市有形）			
特筆すべき 文 化 財	・山門（写真No.1）	・祖形一石五輪塔（写真No.4）		
	・石祠（写真No.5）	・宝塔(写真No.8)		
	・講堂跡（写真No.13）	・山王七社大権現（写真No.17）		
	・應曆寺国東塔（写真No.20）			
寺 院 管 理 状 況	<p>〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本堂内には、本尊以外に各堂宇にて安置されていた仏像について、風化を避けるために移動可能なものについては本堂内に安置されている。燈明像は、ガラスケース内に納められ展示されている。 ・奥の院を形成する石垣の南側の斜面地において、土師器片が多量に散布しているのを確認した。時期としては、13世紀頃の土師器皿などが主体を占めると考えられる。また、嶽ノ堂跡周辺においても、土師器の散布がみられ、今後、考古学的遺物と安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』や嘉元二年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』といった文献資料との比較検討を行うことで、より正確な開基時期などの解明につながるものと考えられる。 ・嶽ノ堂跡地において、長胴型の瓶と思われる土師器底部を表採した。経筒の可能性が考えられるが、類例が少なく今後の精査が必要と思われる。（土師器散布域を大岩屋実測図に記載） ・Ⅲ・Ⅳ区にある石段（図版②参照）については、老朽化が進み石が動くものがみられる。また、土器散布域も斜面からの土砂の流入が顕著である。 ・住職によると、應曆寺は本堂が立地する地点から約300m程南側に下った地点にあったとされ、現在の不動堂跡地周辺に存在していた可能性が示唆される。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・六郷山中山本寺の古刹であり、養老二年（718）に仁聞菩薩の開基と伝えられる。 ・大岩屋山應曆寺に関する記録は、長承四年（1135）の『夷住僧行源解状』に「大石屋」の記載があり、安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』、嘉元二年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』、建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』等には「大岩屋」の記載がみられる。 ・戦国時代以降、兵乱により衰退したが、『太宰管内志』によると両子寺の順慶法印の弟子の登慶により中興されたとされる。中興の時期については、寛永二年（1625）と元禄八年（1695）の二つが記録として残されている。 ・應曆寺の堂宇・坊跡については、『太宰管内志』収録の『天明年中（1781～1788）六郷山寺院名簿』には、「國崎郷大岩屋村應曆寺延岡領青蓮末 一鎮守四所権現ノ岩屋 一千手観音堂、一妙見ノ岩屋、一十一面観音ノ岩屋、一不動堂、云々」との記載がみられる。また、『真玉町誌』によると元禄十四年（1701）の應曆寺古文書に、院主西之坊・下西坊・上之坊・下之坊・夢中坊・中覚坊・円寿坊などの坊跡の記載がみられる。その他にも、四所権現岩屋・観音御堂・妙見岩屋・十一面岩屋・不動御堂・山神五ヶ所・多宝社なども記録されている。 ・六所権現については、大正の初めに奥の院から現在地に下されたものである。本堂・庫裡については、昭和5～7年にかけて改築が行われている。 			

寺院現況及び変更点

＜Ⅰ区（應曆寺本堂周辺）＞(図版②、③：大岩屋実測図・Ⅰ区・Ⅲ区・Ⅳ区拡大図参照)

- ・参道を登ると、江戸時代前期を降らないと考えられる山門があり、仁王像が配されている。(写真No.1)
- ・本堂(写真No.2)のある境内において、南北朝期の作とされる宝篋印塔(市有形)(写真No.3)や祖形一石五輪塔(写真No.4)、室町期の作とされる中に聖徳太子像が彫られた石祠(写真No.5)、正面に仁王像を配した観音堂(写真No.6)などが存在している。その他、本堂手前に曼荼羅壘石や鐘楼・石殿など多数の石造物がみられる。
- ・本堂西側の平坦面には、多数の五輪塔や宝塔がみられるが、下流の坊畑周辺にあったものを移動させたものである。(写真No.7)また、宝塔は室町期の作とされる。(写真No.8)
- ・本堂内には、江戸中期以降の作と考えられる燈明像(写真No.9)があり、ガラスケース内に保管されている。(市有形)
- ・本堂の裏側に座主墓地が存在している。(写真No.10)貞享元年(1684)の「□□道教為菩提」以降、文政五年(1822)や元禄八年(1695)の銘などが確認できる。

＜Ⅱ区（本堂北西側墓地及び参道）＞(図版②：大岩屋実測図参照)

- ・本堂より奥の院への参道を登ると、左右に沿うように近世墓地が存在している。

＜Ⅲ区（六所権現～堂ノ迫磨崖仏）＞(図版②、③：大岩屋実測図・Ⅰ区・Ⅲ区・Ⅳ区拡大図参照)

- ・文政二年(1819)の銘が確認できる鳥居があり、同平坦面上に六所権現を祀る拝殿・申殿・本殿が立地している。この六所権現については、奥の院に祀られていたものを、大正の初め頃に現在の場所に移動したものである。(写真No.11,12)この六所権現の拝殿向かって右側に講堂跡がある。(写真No.13)講堂跡の敷地面積は400㎡であり、現在礎石跡が確認できる。講堂跡は若干高く、心持ち長軸を参道側に向けている。礎石は径約60～100cmの自然礫であり、5間×4間に配置される。
- ・六所権現より参道を10m程石段を登ると右側の岩壁に堂の迫磨崖仏(県史跡)(写真No.14)が存在している。

＜Ⅳ区（御神木～姥ヶ懐（奥の院）周辺）＞(図版②：大岩屋実測図参照)

- ・堂の迫磨崖仏から参道を登ると、その脇に御神木の切株がある。そこから、さらに参道を登ると左側に笠部材が落下している石灯籠が1基(写真No.15)位置している。その奥の平坦面が、タケン堂もしくは嶽ノ堂と呼ばれる享保二年に焼失したとされる嶽の権現社が祀られていた跡地とされている。(写真No.16)また、Ⅰ区の観音堂前仁王像は、本来この場所にあったものを移設したものである。
- ・嶽ノ堂より西側奥へと進むと岩壁があり、その正面に山王七社大権現がある。(写真No.17)石祠の奥壁には種子曼荼羅が刻まれている。
- ・嶽ノ堂より奥の院へと続く石段左側には、やや大型の礫に磨崖仏が1躯彫られており、そこから石段を登りきった地点にも同じように磨崖仏が1躯彫られている。両者とも時期などについては不明である。
- ・参道を登りきると東側に石垣で形成された平坦面があり、そこが奥の院・姥ヶ懐と呼ばれる場所である。(写真No.18)間口12m×奥行6mの南側に開口した岩屋の中に、現在は小堂が建てられている。(写真No.19)堂内には、焼仏が安置されており、堂内外の壁面に墨書が確認できる。この岩屋の東側には、室町期の国東塔2基分が倒壊した形で残されている。(写真No.20)
- ・奥の院から嶽ノ堂周辺において、13世紀代を中心とした土師器片などが一定量散布しているのが確認できた。
- ・踏査により奥の院背後の尾根上において、一石五輪塔を1基確認した。(写真No.28)

＜その他坊跡及び石造物＞(図版①：詳細位置図参照)

◎エザリ坊跡

- ・應曆寺の北側200m程が推定地である。石造物などはみられない。(写真No.21)

◎不動堂跡

- ・應曆寺から約300m下った地点に不動堂跡地がある。(写真No.22)住職の話によれば、現在應曆寺本堂内に安置している不動明王像はここに置かれていたという。周辺には、石造仏や板石が5基認められる。

◎十一面観音岩屋

- ・不動堂の対岸で、元禄十四年(1701)の應曆寺古文書に十一面岩屋の記載がある。(写真No.23)

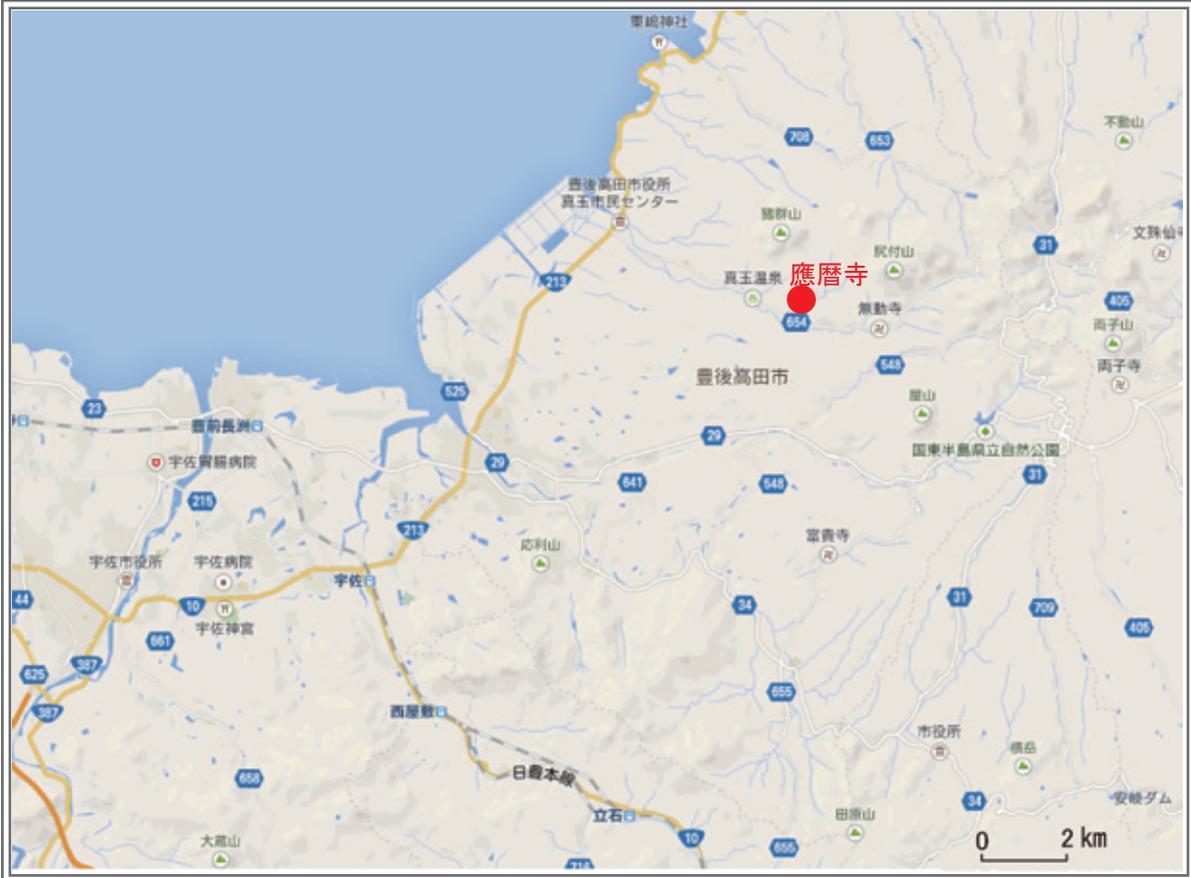
◎坊畑

- ・坊跡と考えられるが、中世～近世にかけての石造物等は見られない。(写真No.24)

《主要参考文献》

- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 1994
- ・『六郷満山関係文化財総合調査概要―豊後高田市・真玉町・香々地町の部―』大分県文化財調査報告書 第37輯
- ・『国東半島の山岳霊場遺跡 資料集 一六郷山の寺院と信仰―』九州山岳霊場遺跡研究会 2014

図版① 應曆寺 位置図
市域位置図



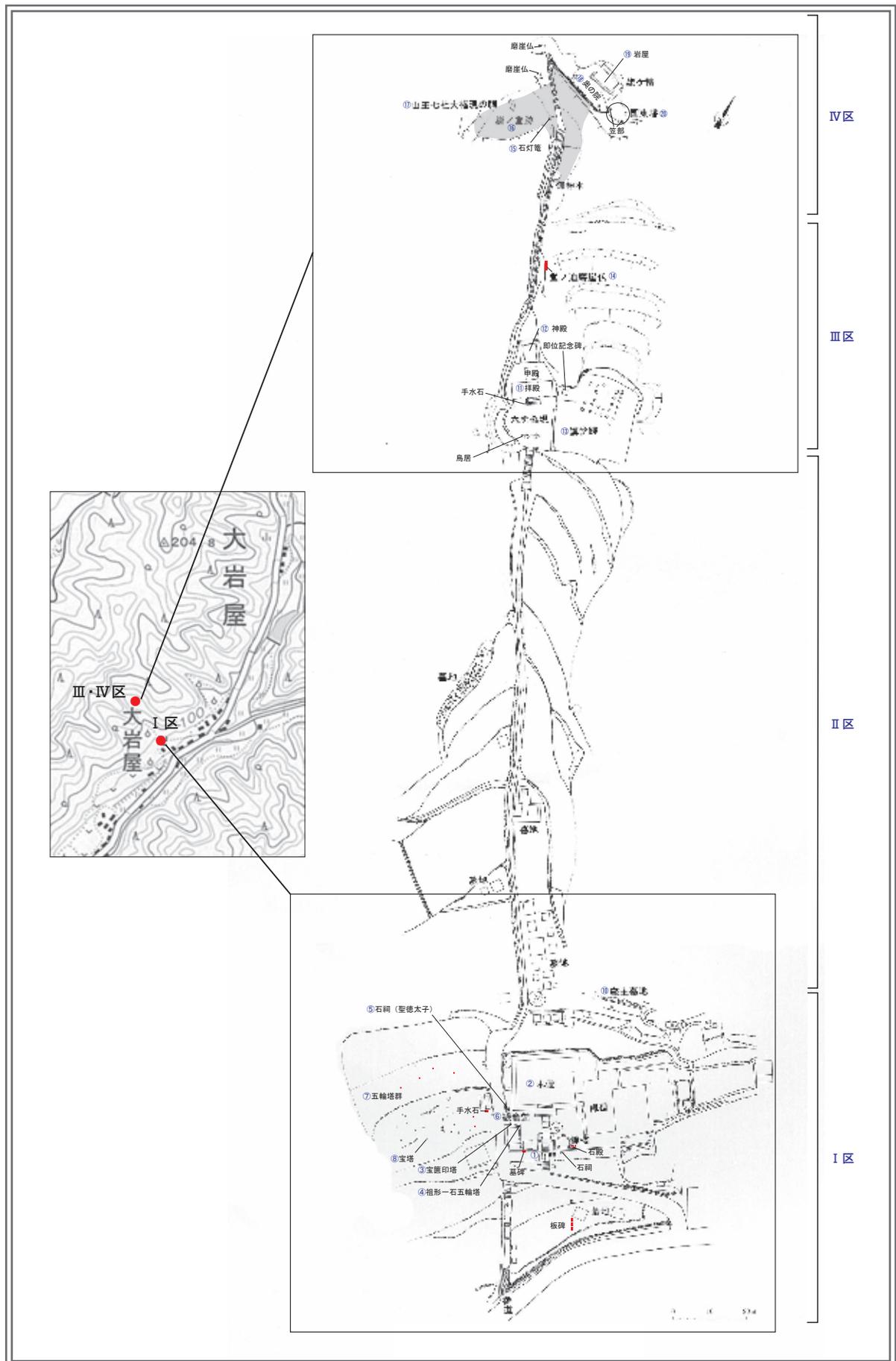
詳細位置図



※番号は、写真No.とリンク

真玉地区

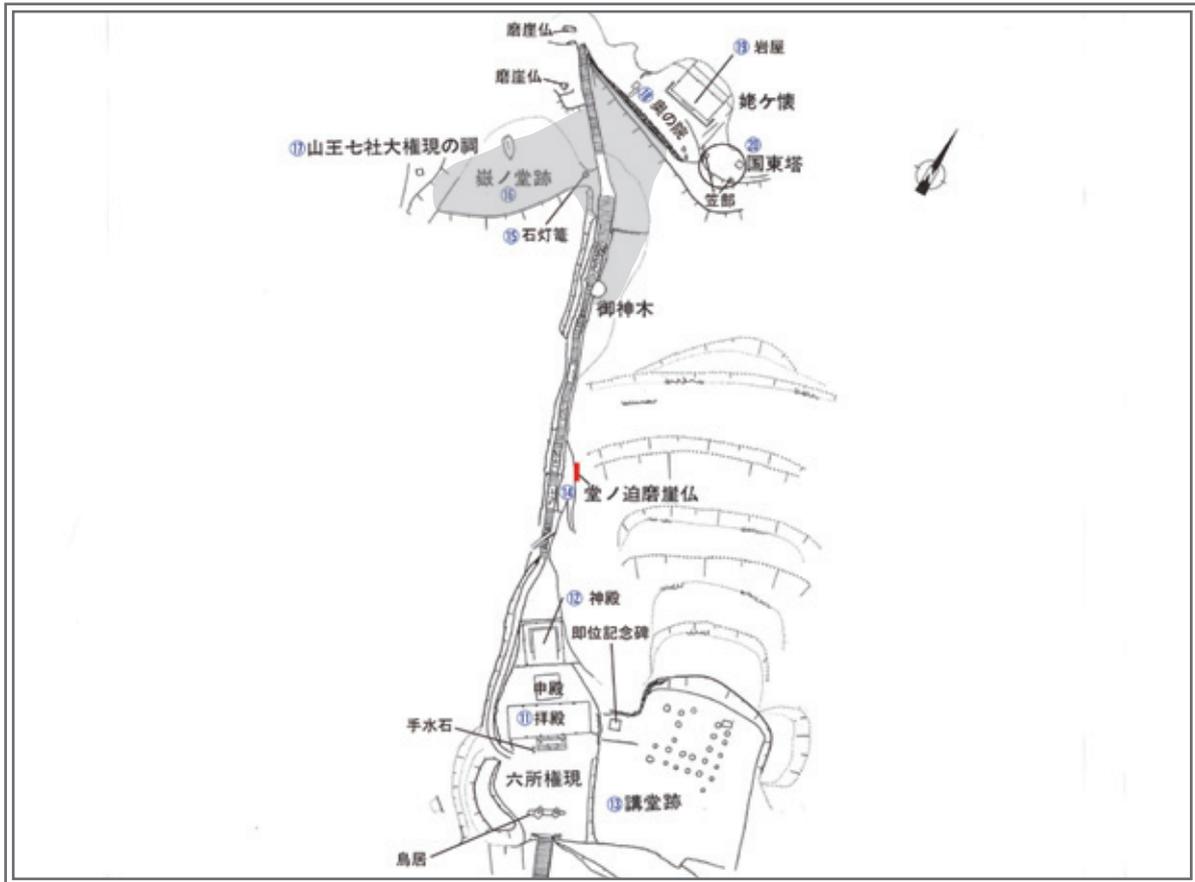
図版② 大岩屋（大岩屋山應曆寺）実測図



※①～⑳の番号は、写真No.とリンク
 (⑨については本堂内に安置されている)
 ■ 土器散布範囲

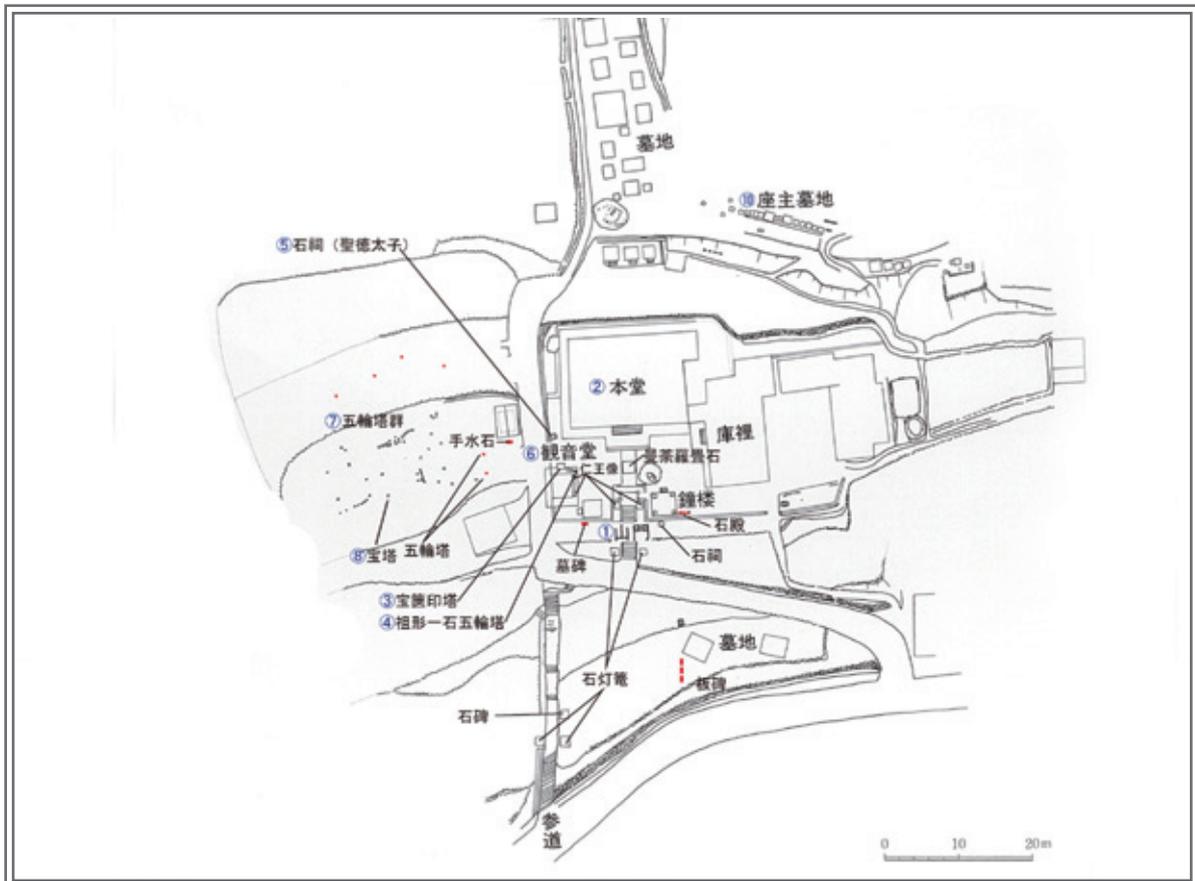
図版③ I区・III・IV区拡大図

III・IV区拡大図



土器散布範囲

I区拡大図



文化財の現況・詳細（1）



1：山門 図版②、③参照：I区／時期：江戸前期

- ・現存する六郷山寺院には珍しく、薬医門の形式をとる。木鼻などの彫物もしっかりしており、江戸前期を降らないものとみられる。（「六郷満山関係文化財総合調査概要」大分県教育委員会 1976）



2：應曆寺本堂 図版②、③参照：I区／時期：昭和7年以降？

- ・昭和5年～7年にかけて改築を行っている。
- ・本堂内には、燈明像や役行者像等の石造仏や本尊である千手観音像、阿弥陀如来坐像、不動明王坐像などの県・市指定有形文化財を安置している。



3：宝篋印塔 図版②、③参照：I区／時期：南北朝期

- ・南北朝時代の作と考えられ、完形の優良なものである。（「六郷満山関係文化財総合調査概要」大分県教育委員会 1976）
- ・市指定の有形文化財に指定されている。



4：祖形一石五輪塔 図版②、③参照：I区／時期：鎌倉時代

- ・鎌倉時代の製作と推定される。小形の優良なものである。（「六郷満山関係文化財総合調査概要」大分県教育委員会 1976）



5：石祠（中に聖徳太子像） 図版②、③参照：I区／時期：室町時代

- ・室町時代の作と推定され、祠の中に聖徳太子像が浮き彫りされている。
- ・奥の院の手前の石に浮彫りされている磨崖仏についても、聖徳太子像という報告もあるが詳細は不明である。



6：観音堂 図版②、③参照：I区／時期：-

- ・観音堂の前面に仁王像を配している。この仁王像は、以前は嶽ノ堂（境内図参照）にあったものを移設したものである。
- ・観音堂内には、子安観音像が30体ほど安置されている。

文化財の現況・詳細 (2)



7:本堂西側五輪塔群 図版②、③参照:Ⅰ区/時期:近世頃か

- ・本堂西側に五輪塔等が集積されている。以前は坊畑周辺にあったものを、こちらに移動させたということである。時期などの詳細な点については不明である。



8:宝塔 図版②、③参照:Ⅰ区/時期:室町時代

- ・本堂西側の五輪塔群と一緒に宝塔が1基存在している。室町期の作とされる。



9:燈明像 本堂内/時期:江戸中期以降

- ・1人の力士が太鼓を背負って立ち上がろうとし、他のもう1人が後方からそれを支えた姿のものである。円筒形の太鼓の部分が火袋となっているが、実際の点燈は困難である。室町時代の作と伝えられているが、恐らく江戸中期以降の作と推定される。杵築市大田の田原八幡社にも、同種のもが境内に置かれていたが、現在は神庫に保管されている。〔六郷満山関係文化財総合調査概要〕大分県教育委員会 1976)



10:座主墓地 図版②、③参照:Ⅰ区/時期:近世以降

- ・本堂の裏側に座主墓が存在している。貞享元年(1684)の「□□道教為菩提」以降、元禄八年(1695)や文政五年(1822)の銘などが確認できる。
- ・周辺には、近代にかけての墓地も存在している。



11:拝殿 図版②、③参照:Ⅲ区/時期:近世か

- ・文政二年(1819)の銘が確認できる鳥居を過ぎると、やや拓けた平坦面が存在しており、六所権現を祀る拝殿及び本殿が立地している。
- ・拝殿は約6m×3m程の範囲で建てられており、周辺に目立った石造物などはみられない。
- ・六所権現は、以前奥の院に祀られていたものを、大正時代に現在地に遷座したということである。



12:本殿 図版②、③参照:Ⅲ区/時期:近世か

- ・現在、本殿を覆う覆屋が造られている。
- ・史料によると、安貞二年(1228)には「六所権現」の記載がみられるが、元禄~天明期にかけては「四所権現」の名称で記録が残されている。しかし、文政二年(1819)銘の鳥居神額には、「六所権現」と刻まれている。そのため、近世段階において一時的に四所権現として祀られていた可能性が考えられる。

文化財の現況・詳細 (3)



13: 講堂跡 図版②、③参照：Ⅲ区／時期：?～近世?

- ・約400㎡の敷地面積内に、約60cm～100cm程の自然礫を4間×5間に配置している。その長軸は、心持ち参道側へと向けている。
- ・『太宰管内志』に「入三間に横四間ノ堂なり是も南向にして本尊は正観音」とあり、この講堂を指したものと考えられる。(六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1994)



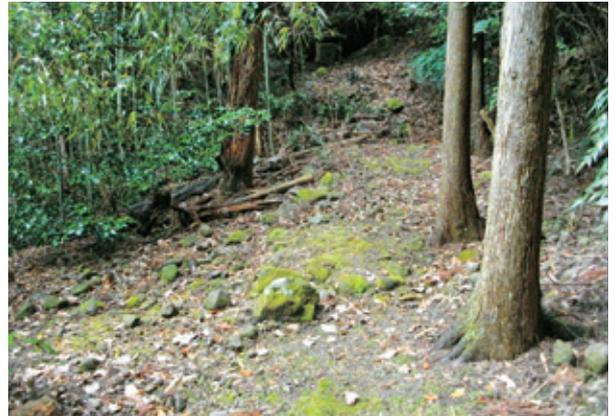
14: 堂の迫磨崖仏 図版②、③参照：Ⅲ区／時期：室町時代

- ・室町時代の作といわれ、左側から六観音立像・十王坐像・六地藏立像・比丘坐像・比丘尼坐像・司録立像の順に彫られている。
- ・浄土信仰を表していると考えられ、そのため閻魔大王をはじめとする十王や生前の行いから人々を救うとされる六地藏・六観音をみることができる。
- ・現在、県指定史跡に指定されている。



15: 石灯籠 図版②、③参照：Ⅳ区／時期：元禄期

- ・嶽ノ堂（タケン）入口付近にあり、笠部材が落下している。
- ・元禄期に寄進されたものである。
- ・平成26年度の現地調査に伴い周辺の踏査を行った。その際に、この石灯籠周辺において、土師器片が一定量散布しているのを確認した。時期・器種については、12世紀末頃～14世紀の土師器の坏や皿などがみられる。



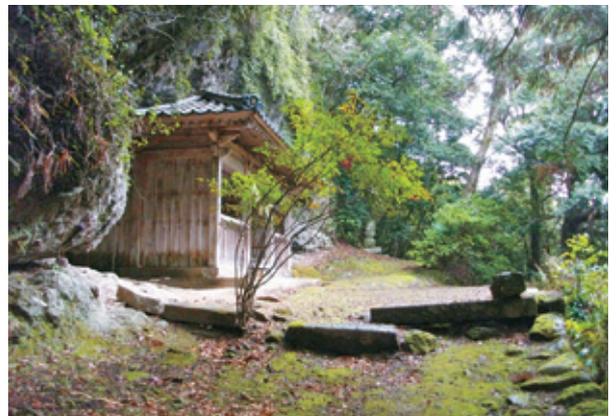
16: 嶽ノ堂跡 図版②、③参照：Ⅳ区／時期：-

- ・奥の院手前の西側平坦面にあったとされる堂跡である。享保二年（1717）に、嶽の権現社が祀られていたが、焼失したということである。現在、石造物などはみられない。
- ・堂跡周辺では、土師器などの散布が少量であるが確認できる。その中に、経筒の可能性が残る長胴の瓶と思われる土師器片が認められた。



17: 山王七社大権現 図版②、③参照：Ⅳ区／時期：-

- ・嶽ノ堂跡をさらに西側奥へ進んだ所に山王七社大権現がある。
- ・石祠の奥壁には種子曼荼羅が刻まれている。



18: 奥の院(姨ヶ懐) 図版②、③参照：Ⅳ区／時期：中世

- ・参道の最奥部の右側に奥の院（姨ヶ懐）があり、石垣により平坦面を形成している。岩屋の奥には国東塔の残欠が残る。
- ・岩屋自体は中世段階で成立したものと考えられる。

文化財の現況・詳細（4）



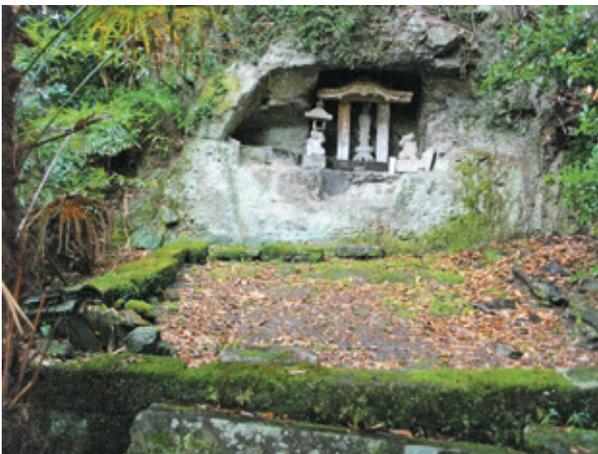
19:奥の院岩屋 図版②、③参照：Ⅳ区／時期：中世

- ・間口12m×奥行6mの南側に開口した岩屋の中に、現在小堂が建てられている。
- ・大正以前は、こちらに六所権現が祀られていたということである。
- ・奥の院は「姨ヶ懐」とも呼ばれている。峯入りの際に21年目の行者が、ここで帯を解き、汗をぬぐって美食することが許されたということである。
- ・御堂の内外の壁には、墨書が確認でき、寄進札とあわせて天保五年（1834）に建てられた事がわかる。



21:エザリ坊跡（推定地） 図版①参照／時期：-

- ・エザリ坊推定地は、ちょうど谷部になっており、現在は椎茸畑になっている。
- ・周辺に建物跡や石造物などはみられない。



23:十一面観音岩屋 図版①参照／時期：元禄14年以前

- ・不動堂跡地の対岸に立地している。元禄十四年（1701）の應曆寺古文書内において「十一面岩屋」の記載がみられる。そのため、元禄十四年前後には、存在していた可能性が考えられる。



20:應曆寺国東塔 図版②、③参照：Ⅳ区／時期：鎌倉～南北朝期

- ・2基分の国東塔部材が存在しており、2基とも鎌倉時代から南北朝期の作と思われる。
- ・復元できれば、県指定の重要文化財として指定される価値は十分にある秀作である。（「六郷満山関係文化財総合調査概要」大分県教育委員会 1976）



22:不動堂跡 図版①参照／時期：元禄14年以前

- ・現在は、石垣のみが残されている。周辺では、龕内に石造仏が安置されているものや、稲荷祠などが存在している。
- ・元禄十四年（1701）の應曆寺古文書内には「不動御堂」の記載が残されているが、現在確認できる不動堂跡がそれに該当するかは不明である。



24:坊畑周辺 図版①参照／時期：-

- ・坊畑と呼ばれる坊跡地と推察される。周辺の踏査を行っているが、石造物などは確認できなかった。

文化財の現況・詳細 (5)



25:不動明王坐像 本堂内/時期：平安後期

- ・本堂内左側に祀られている。住職によれば、以前は下流の不動堂跡に安置されていたものである。(県指定有形文化財)
- ・台座の上面に墨書による修理銘が残る。
「不動岩屋□□彫刻宇佐宮神官百楽右衛門栗田宿祢時右」



26:不動明王立像 本堂内/時期：鎌倉期

- ・不動明王坐像の右側に安置されており、市指定有形文化財に指定されている。鎌倉期の作とされる。



27:千手観音立像・阿弥陀如来坐像 本堂内/時期：鎌倉期～室町期

- ・本堂中央に市指定の千手観音立像と阿弥陀如来坐像が安置されている。前者が鎌倉期の作とされ、後者は室町期の作といわれる。
- ・千手観音は、奥ノ院に祀られていたが、明治初年に神仏分離によって移転している。
- ・阿弥陀如来は延暦寺の一山に安置されていたものを大岩屋出身の比叡山西塔大仙院已講光観僧正によって献納されたといわれる。



28:一石五輪塔 奥の院背後尾根上/時期：-

- ・奥の院の北側の尾根上において巨石の上に置かれた一石五輪塔を確認した。時期や安置された経緯などは不明である。

寺院名	無 動 寺		寺院番号	㊸
所在地	大字黒土			
居住状態	有住		種 別	個 数
指定文化財	薬師如来坐像及び十二神将（県有形） 薬師如来坐像（県有形） 大日如来坐像（県有形） 不動明王坐像（県有形） 日光月光菩薩像（市有形） 身濯神社寄進札（市有形） 身濯神社磨崖宝塔（市有形） 福真磨崖仏（県史跡） 中の坊磨崖仏（市史跡）	各種文化財 員 数	木 造 建 築	
			礎 石 跡 等	
			石 造 物	7
			仏 像	5
			美 術 品	
			古 文 書	
			そ の 他	3
			特筆すべき 文 化 財	・ 現無動寺宝篋印塔残欠（写真No.3）
・ 身濯神社国東塔（写真No.12）	・ 身濯神社磨崖種子（写真No.20）			
・ 青銅製経筒蓋（写真No.23）	・ 陶製経筒（写真No.23）			
寺 院 管 理 状 況	<p>〈文化財管理状況及び聞き取り調査概要〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現無動寺の裏山に位置する1・2号岩屋の御堂及びその廃材は、倒壊もしくは崩落のおそれがある。 ・ 旧無動寺跡と想定される身濯神社は、周辺住民の方により管理されている。境内に残る磨崖宝塔については、風化が著しく保存にむけた取り組みが早急に必要である。また、旧観音堂についても老朽化が著しい。平成27年2月現在において、擁壁工事が行われており、境内を横切る形で工事が進められている。 ・ 平成25年度の現況確認調査において山王権現前で確認された青銅製経筒蓋や陶製経筒の出土について聞き取りを行ったが、詳細は不明である。 ・ 身濯神社西側にあったとされる斉藤屋敷の親族である佐當その子氏に聞き取ることができた。佐當氏によると、以前は立派な屋敷が存在していたということであり、地域の神社や仏閣に対して寄進や奉納などを積極的に行っていたということである。また、佐當その子氏の御主人である佐當角雄氏は、真玉郷土委員会の会長を務められた方であり、斉藤屋敷とその裏側に無動寺跡が存在したという話を聞いたことがあるという事であった。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・ 明治23年の『県政資料寺院明細牒』によると、養老年間に鷹栖法蓮大和尚の開基と伝えられる。 ・ 長承四年（1135）の『夷住僧行源解状案』には、「小石屋」と記載される。 ・ 安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』に、「中山分 小岩屋山、本尊薬師如来、六所権現於御寶前、二季祭 五節供等、今始御祈祷」と記載される。 ・ 建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、「中山 小岩屋 限東美尾 限西堂山美尾 限南西佛 限北大石」とその範囲が記載される。 ・ 中世末から近世の作とされる仁安三年銘の『六郷二十八山本寺目録』に、「小岩屋山無動寺」とある。 ・ 現在の小岩屋山無動寺は、近世になり比叡山無動寺より下向した圓舜大和尚によって現在の位置に中興開基したとされる。現無動寺の墓地には、中興開基一世にあたる圓舜大和尚の元禄八年(1695)の墓碑が最も古く、それ以降、現代に至るまで住職の墓碑が並んでいる。（『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1994） 			

寺院現況及び変更点

- ・無動寺は、現無動寺の下流に鎮座する身濯神社一帯に位置していたとされる。文献等の記載にみられる「小岩屋」という無動寺を示す名称が、下黒土地域の範囲と重っており、身濯神社一帯がその中心となる。また、建武四年(1337)の『六郷山本中末寺次第并四至等注文』には、小岩屋の範囲の四至の一つに「限北大石」とある。この大石について、現無動寺の400m程下流に位置する巨石が該当するものと考えられる。この大石が北限とすると現無動寺は四至の外となってしまう事からも現在の身濯神社付近に旧無動寺が存在していた可能性が高いと思われる。
- ・無動寺の坊跡については、昭和51年の『六郷満山関係文化財総合調査概要』において善蔵坊・慈連坊・アゼツ坊(庵実坊)・仏仙坊・仏性坊・中之坊などの6ヶ所の坊跡の位置が確認されている。また、昭和53年の『真玉町誌』には、8ヶ所が聞き取り調査により判明したとする。
- ・無動寺については、①現無動寺周辺、②旧無動寺(現身濯神社)周辺、③身濯神社東側(観音堂・不動屋敷)周辺、④中の坊周辺、⑤身濯神社西側の坊跡、の5地点に分け現況をまとめる。

〈①現無動寺周辺〉(図版①：詳細位置図参照)

- ・現無動寺では(写真No.1)、境内に多くの石造物が安置されている。確認できたもので、五輪塔8基や鎌倉末～南北朝期の作とされる宝篋印塔の相輪・笠部材(写真No.2.3)などがある。無動寺の東側の石段を登った所に身濯神社(六所権現)が立地している。(写真No.4)身濯神社の西側にはトレッキングコースが設置されており、1号岩屋の岩壁に到着する。1号岩屋(写真No.5)には、やや荒廃しているが小堂が残っており、不動明王像(写真No.6)が祀られている。この1号岩屋よりさらに登った山頂手前の岩壁の露出した地点に2号岩屋が立地している。(写真No.7)岩屋内には、石造仏が祀られており、その上部には龕跡と思われる痕跡が残されている。その他、岩肌を削って造られた手水場や、以前建てられていた堂跡の建築部材が集積されている。その中には、朱や黒の墨で「上宮」・「上の□□」と書かれた部材もみられる。(写真No.8)
- ・本堂には4軀の11～12世紀造立の木造坐像が安置される。いずれも県指定有形文化財である。
 - ①薬師如来坐像 樟材の一本造で11世紀の造立である。膝裏に墨書の修理銘が残る。
「享保十三戊申(1728)二月吉祥日成就、奉再興薬師如来十二神、為天下泰平御祈禱也
細工者宇佐宮神官百楽右衛門佐時右」
 - ②不動明王坐像 桧材の一木造で12世紀の造立である。
 - ③薬師如来坐像 樟材の一木造で12世紀の造立である。
 - ④大日如来坐像 樟材の一木造で12世紀の造立である。

〈②旧無動寺(現身濯神社)周辺〉(図版②：旧無動寺(身濯神社)実測図参照)

- ・旧無動寺跡と考えられる身濯神社は、三段の平坦面から構成されている。以下、下段からⅠ区～Ⅲ区の調査区を設定し、概要をまとめる。また、身濯神社の西側に旧講堂が存在していた可能性が考えられるためⅣ・Ⅴ区を設定した。

◎Ⅰ区(境内一段目)

- ・現在、西側に下黒土公民館が立地しており、昭和五年銘の鳥居や大正九年銘の石灯籠などが存在している。(写真No.9)また、板碑も1基存在しているが、風化が著しく詳細は不明である。(写真No.10)約800㎡の広さを有している。

◎Ⅱ区(境内二段目)

- ・約250㎡の広さを有しており、多数の石造物が存在している。拝殿へ続く石段の両脇に正徳二年(1712)銘の石灯籠(写真No.11)があり、鎌倉～南北朝期の作とされる国東塔の一部や塔身を欠損した宝篋印塔が残存している。(写真No.12)その他、一石五輪塔や五輪塔の水輪部材、風化が著しく詳細不明の石造物部材の残欠などが存在している。

◎Ⅲ区(境内三段目)

- ・拝殿(写真No.13)手前には、元治二年(1865)銘の狛犬がある。拝殿向かって西側には、太鼓橋が2基存在しており、1基は倒木や雑草により埋没している。(写真No.14)また、太鼓橋から北側には、庚申様が祀られている。(写真No.15)この庚申様が祀られている西側一帯は、倒木や上段の斜面地からの落石等が目立つ。
- ・本殿(写真No.16)は、人為的に彫り込んだ岩屋内に鎮座している。岩屋は間口4.9m×奥行3.1mに彫られており、その岩肌には「弘化二年(1845) 奉岩屋切廣 己二月吉日 十二神同さいしき□□ □主 藤原藤三良」と刻まれている。弘化二年には十二神将が祀られていたことが推定されるが、現在の六所権現が祀られる経緯や時期は不明である。この本殿の前面には、岩盤を「L」字状に削る加工が東西に残されており、講堂の様な建物を配置した痕跡を示すと考えられる。(写真No.17)
- ・本殿より東西両側の岩壁には、磨崖宝塔が浮き彫りされている。東側の磨崖宝塔(写真No.18)については、岩壁に3つの龕が穿たれている。向かって右の龕は、間口2.1m×高さ1.1mで宝塔3基が浮彫りされている。宝塔の横には大きな孔があげられている。中央の龕は、間口2m×高さ約1m×奥行30cmで、3基の宝塔を浮彫りしている。左側の龕には、1基の宝塔が浮彫りされている。このように以前報告の7基すべてを確認することができる。しか

- し、西側については、風化が著しく4基報告されている内の3基しか確認することができない。(写真No.19)
- ・本殿の立地する岩屋の左右には、天保十年(1839)の八大龍神宮と明治廿年の豊前今井津神社が位置している。また、本殿右側の岩壁には曼荼羅種子(写真No.20)と「六所権現」と刻まれた神額が安置されている。
 - ・拝殿の東側には、観音堂へと続く道が形成されており、その左手に山王権現及び龕跡、右手の一段下がった地点に宝塔(写真No.21)が立地している。平成25年度の現況確認調査において、山王権現の石祠前に花瓶として使用されている青銅製経筒の蓋1点及び陶製経筒1点を確認した。(写真No.22.23) 青銅製経筒蓋は、頂部を欠損しており相輪もしくは宝珠はみられない。陶製経筒は、胴部以下の残存で、やや幅広の高台が確認できる。この2点の経筒が出土した時期については、平成5年度の調査報告写真にはみられないが、拝殿内に展示されている平成11年度の台風18号の被害と復興作業の記録写真には、祠の前に経筒が置かれているのが確認できる。これにより平成5年～11年の間に出土したものと考えられる。可能性として、台風による倒木により出土した可能性が高いように考えられる。また、表採ではあるが土師器片を一点確認した。時期については、13世紀代と考えられる土師器坏片の口縁部と考えられる。
 - ・山王権現の東側に人為的平坦面が存在している。『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』によれば、「この平坦面は薬師堂か六所権現社が祀られる最も相応しい場所と考えられ、無動寺の本尊が元々薬師如来であることから推測して、岩屋に薬師と十二神将が祀られ、この平坦面は六所権現社が祀られていた可能性が高い。」としている。礎石及び石造物は確認されていない。(写真No.24)

◎IV. V区(旧講堂跡)

- ・大正十二年に西国東郡役所編纂により刊行された「西国東郡誌」には、無動寺講堂について「講堂は、十町餘下流にありて、入三間横四間、南向きなり、本尊は薬師如来、傍仏は弥勒と観音なり」との記載があり、大正時代には身濯神社内に講堂が存在していた可能性が高い。また、真玉郷土研究会報第1号のP32に「土谷(土谷泰蔵さん)が立ちどまって、ここが斉藤屋敷、この向こうが昔の無動寺跡、講堂は身濯神社の境内にあり大きな陰陽石が手前の畑の中に残っていると話してくれた」とあることから、聞き取り調査を実施したが、その痕跡を確認することができなかった。しかし、あえて状況を復元するならば、IV区に斉藤屋敷、V区に旧無動寺跡(写真No.25)、I区が手前の畑とすると、境内であるⅡ・Ⅲ区のいずれかが講堂となる。Ⅱ区は敷地としてはやや狭く、やはりⅢ区に講堂があったと想定できよう。Ⅲ区で注目されるのは、現本殿前面の岩盤の東西隅を直角に加工した痕跡である。東西間は約11mであり、講堂を想定するに相応しい規模を呈している。現本殿が鎮座する岩屋は、弘化二年(1845)に人為的に掘削されたものであり、岩盤に残る痕跡は、弘化二年以前の講堂とも考えられる。上記したが大正時代頃までは講堂が見濯神社内に存在したことは確実であり、今後その配置が課題である。

◎ボヤシキ(坊屋敷)・ジレンボウ(慈連坊・地連坊)跡周辺

- ・身濯神社(旧無動寺)から真玉川を挟んで、南東側にボヤシキ(坊屋敷)・ジレンボウ(慈連坊・地連坊)と呼ばれる坊跡地がある。ボヤシキについては、財前一孝氏の屋敷がこれにあたとされる。その周辺には、一石五輪塔・五輪塔・無縫塔などが点在している。(写真No.26.27) ジレンボウについては、その推定地に御堂が建てられており5軀ほど仏像などが安置されている。(写真No.28.29)

◁③旧無動寺東側観音堂、不動屋敷周辺>(図版②:旧無動寺(身濯神社)実測図参照)

- ・観音堂は、昭和5年に無動寺の住職等によって建立されたものである。現在は老朽化によって堂内に入れず、諸仏も祀られていない。(写真No.30) 以前の調査では、千手観音像2軀、十一面観音像、弘法大師像2軀、菩薩像などが報告されているが、現在は新しく建てられた観音堂の方へ安置されている。また、人為的平坦面から、観音堂へ向かうと左手の岩壁に龕が作られており、不動明王像1軀と千手観音像を1軀が安置されている。(写真No.31)
- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』(1994)では、観音堂内に木造観音菩薩像が安置されてあったといい、その胎内に納入されていたという陀羅尼一卷が小岩屋区の個人宅に伝わっていると報告されている。
- ・観音堂の東側に急傾斜の階段が設けられており、その上り口付近に石祠の残欠が1基ある。この階段を登ると観音堂裏側の崖面上へと至り、そこで石祠2基・石灯笼2基・水盤1基の石造物を確認した。聞き取り調査によると、以前は稲荷を祀っていたということである。
- ・観音堂から、東側へ行くと巨石が位置しており、その前面に石祠1基と石灯笼を確認した。銘などは確認できないが、その形態から近世と考えられる。
- ・観音堂より南東方向へ20m程離れた地点は、不動屋敷(写真No.32)と呼ばれており、板碑型墓碑2基・墓碑2基・台座(台石)部材が立地している。この板碑や墓碑が集中している地点から1段上がった畑の中央付近に一石五輪塔1基・火輪と思われる部材1点が置かれている。
- ・不動屋敷から、南側の県道へと抜ける里道沿いに新しく建立された観音堂がある。(写真No.33) 観音堂は3年程前に近隣住民の方々が、昭和5年に建立された観音堂の老朽化に伴い建替えたもので、その際に、旧観音堂周辺に存在していた石造仏をこちらに移動させたということである。観音堂内には、千手観音像、引法大師像など計5軀が安置している。(写真No.34) また、この観音堂の向かい側に不動明王像が1軀祀られている。
- ・不動屋敷から北西方向に約20m程移動した地点で、五輪塔群を確認した。一石五輪塔を含め7基程が一ヶ所に集められている。(写真No.35)

◁④旧無動寺西側、中の坊跡周辺＞（図版①：詳細位置図参照）

- ・身濯神社（旧無動寺跡）の西側一帯が中の坊跡地として比定されている。この中の坊一帯は、近年落石防止のための擁壁工事が行われており、その裏側の斜面地に立地している。大日如来・阿弥陀如来・地藏菩薩等の磨崖仏（写真No.36）と磨崖板碑（写真No.37）及び多数の五輪塔（写真No.38）が集中して置かれている。立地している環境が斜面地ということもあり、落石や倒木がやや目立つ印象を受ける。この中の坊磨崖仏から、東側へ移動すると、岩面の張り出した地点がある。この張り出した部分は、巖乃院明王堂（写真No.39）という名の御堂で囲まれており、その御堂の中にある岩面に不動明王の梵字が彫られている。（写真No.40）堂の周囲には、多数の石造物が見られるが、聞き取り調査によると擁壁工事の際に移動する必要のあった石造仏等を集めたということである。

◁⑤旧無動寺東側坊跡＞（図版①：詳細位置図参照）

◎福真磨崖仏

- ・身濯神社（旧無動寺）から500m程東へ向かうと右手側に県指定史跡である福真磨崖仏が位置している。岩壁には、胎蔵界曼荼羅や不動明王・六観音坐像・金剛界五仏坐像等の磨崖仏が彫られている。南北朝期の作と推定される。（写真No.41）

◎『限北大石』、仏性坊

- ・福真磨崖仏から東へ進むと、建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』の四至に記載がみられる「限北大石」が存在している。（写真No.43）この「大石」の北東方向の山腹が仏性坊とされる。この場所について正確に把握するため、黒土地区在住の鴛海年春氏（昭和5年生まれ）に同行していただいた。その入口は、県道654号線に面している糸永家墓地横の里道であり、入って直ぐに一石五輪塔1基が置かれている。仏性坊は、そこから直ぐ上面の段上にあったとされているが、現在はシイタケ畑になっている。付近には井戸跡があり、鴛海氏が幼少の頃までは、水があったということである。
- ・仏性坊の裏側の山道を10m程進むと、岩壁の頂部へと至る。この地点に板碑型墓碑等が多数確認できる。倒木が多く全体的な個数までは把握できていないが、6基以上の石造物が存在するものと推測される。また、今回の調査では確認できなかったが、鴛海氏によれば、丸い形の墓があったという。そのため、無縫塔が存在している可能性は高いと思われる。（写真No.44）

◎アゼツ坊・慈連坊

- ・アゼツ坊と慈連坊については、聞き取り調査及び踏査を行ったが、伝承や石造物などは確認することができなかった。

◎善蔵坊

- ・善蔵坊推定地付近において聞き取り調査を行ったところ、糸永英治氏宅の裏山に以前社が存在していたということである。現糸永氏のお宅は、その社の建築部材を転用して建てられたということであった。社跡地には糸永英治氏に同行していただき、一石五輪塔及び宝塔の部材残欠（写真No.45）を確認した。推測の域は出ないが周辺において坊が存在していた可能性を示すと考えられる。

◎仏仙坊・法泉坊

- ・中黒土地区の集落の中心部に仏仙坊・法泉坊の推定地が存在している。周辺には、五輪塔や石祠など石造物（写真No.46.47）が多数存在しており、周辺に坊が存在していた可能性が考えられる。銘が確認できたもので、文化八年（1811）の石祠などがみられる。

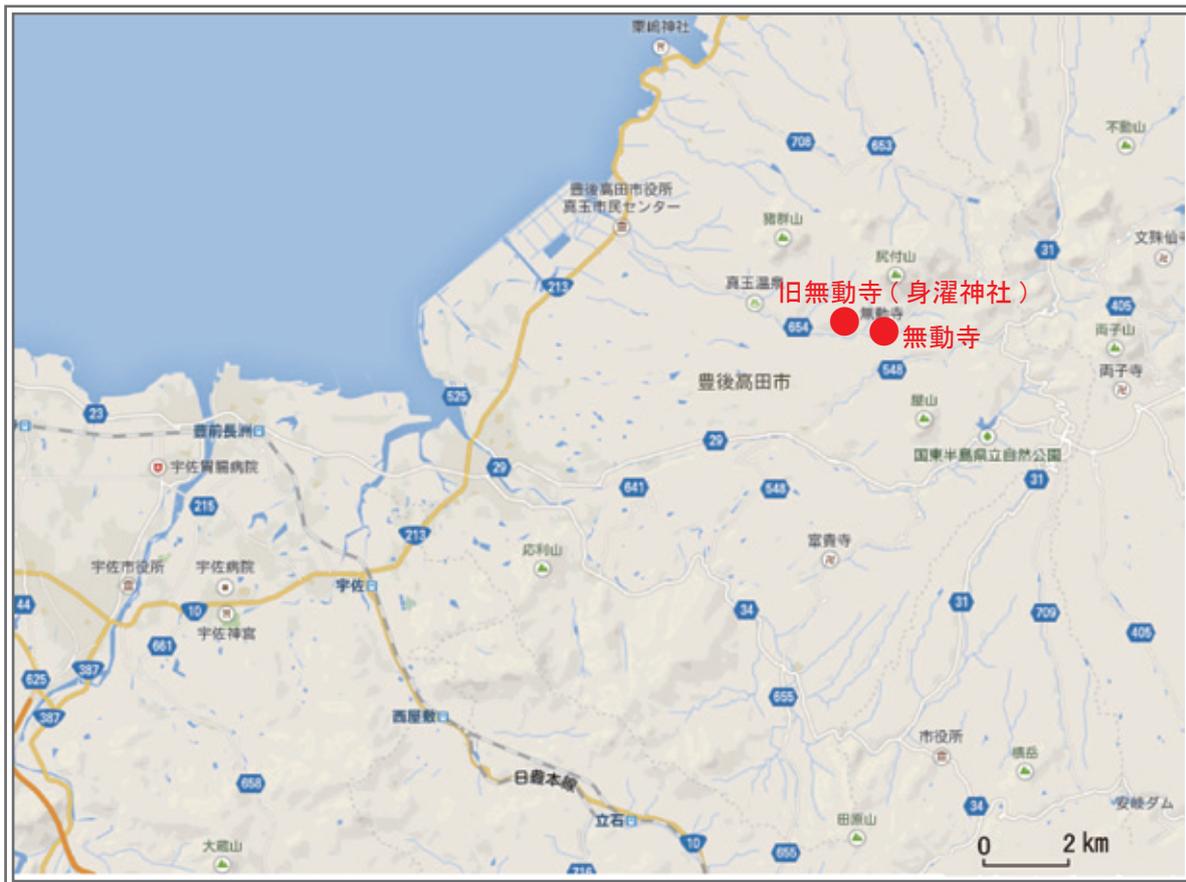
◎寶泉坊

- ・仏仙坊・法泉坊推定地から、本松地区へ移動する途中に寶泉坊跡地が存在している。聞き取り調査により以前は「フーセン坊」と呼ばれていたということである。（写真No.48）

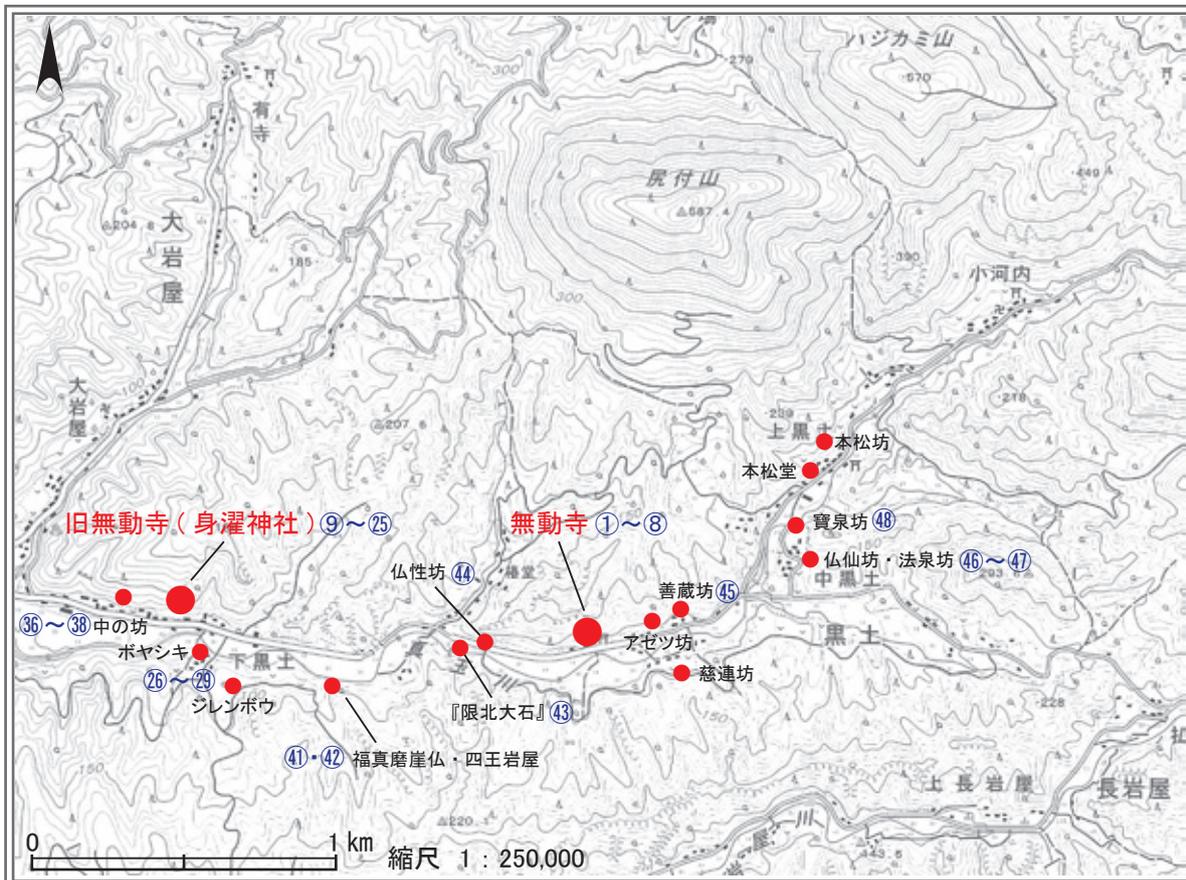
◁主要参考文献＞

- ・『真玉町誌』 真玉町教育委員会 1978
- ・『西国東郡誌』 西国東郡役所 1923
- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書II』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 1994
- ・『六郷満山関係文化財総合調査概要一豊後高田市・真玉町・香々地町の部一』 大分県文化財調査報告書 第37輯 大分県教育委員会 1976

図版① 旧無動寺(身濯神社)・現無動寺 位置図
市域位置図



詳細位置図



※番号は、写真No.とリンク

真玉地区

文化財の現況・詳細（1）



1：現無動寺全景 図版①参照／時期：17世紀後半～中頃

- ・圓舜大和尚によって17世紀中頃～後半に中興開基したとされる。
- ・現在の無動寺の位置が、黒土岩屋（本松房）の故地とされる。



2：無動寺境内 五輪塔群 図版①参照／時期：近世前半頃か

- ・境内の左手側に8基ほどの五輪塔が確認できる。時期などについては不明である。



3：宝篋印塔残欠 図版①参照／時期：鎌倉末～南北朝期

- ・宝篋印塔の相輪と笠部材と思われる残欠が残されている。鎌倉末～南北朝期の作とされるが、境内に安置されている経緯は不明である。

〔「六郷満山関係文化財総合調査概要」大分県教育委員会 1976〕



4：身濯神社（六所権現） 図版①参照／時期：－

- ・現無動寺東側に位置している。周辺に石祠が2基存在している。



5：1号岩屋 図版①参照／時期：中世？

- ・身濯神社から山道を進むと、崖面に1号岩屋が立地している。堂は、やや荒廃している印象を受ける。
- ・現無動寺が黒土岩屋（旧本松房）跡と考えられており、中世より続く岩屋の可能性も考えられる。



6：不動明王像（1号岩屋内） 図版①参照／時期：－

- ・1号岩屋の堂内に、不動明王像を1躯確認した。
- ・堂跡は風化が著しく、堂内の詳細な確認作業は行えていない。

文化財の現況・詳細 (2)



7: 2号岩屋 図版①参照/時期: 中世?

- ・ 1号岩屋から山道を登った地点に立地している。1号岩屋と比べると比較的広く、石造仏や龕跡、堂を設置するために彫られた岩壁などが確認できる。
- ・ 2号岩屋も黒土岩屋(本松房)に関連する可能性がある。



8: 2号岩屋(朱書き廃材) 図版①参照/時期: -

- ・ 2号岩屋内に堂跡の建築部材が集積されている。部材の中には、「上宮」と朱書きされたもの等が確認できる。



9: 身濯神社(旧無動寺) 全景 図版①参照/時期: 長承4年?

- ・ 旧無動寺跡とされる。大正9年の鳥居や昭和5年に建立された石灯籠が存在している。
- ・ 長承四年(1135)の『夷住僧行源解状案』に「小屋屋」の記載がみられるため、早い段階で岩屋として成立していた可能性も残る。



10: 板碑 図版②: I区(1段目)/時期: -

- ・ I区の鳥居横に板碑と思われる石造物が1基存在している。風化が著しく、銘や時期などは確認できない。



11: 石灯籠 図版②: II区(2段目)/時期: 正徳2年

- ・ III区の拝殿へ続く、石段の両脇に正徳二年(1712)銘の石灯籠が確認できる。拝殿向かって右側には石造物群が集中している。



12: 国東塔・宝篋印塔 図版②: II区(2段目)/時期: 鎌倉~南北朝

- ・ 鎌倉~南北朝期と考えられる部分的に欠損した国東塔と、おそらく鎌倉時代と考えられる宝篋印塔(塔身部欠損)が確認できる。
- ・ 周辺に一石五輪塔や水輪などの石造物が安置されている。

文化財の現況・詳細 (3)



13: 拝殿 図版②：Ⅲ区（三段目）／時期：－

- ・ 拝殿手前には、元治二年（1865）の銘が残る狛犬が配されている。
- ・ 拝殿は平成11年の台風により被害を受け、その後修復されている。



14: 太鼓橋 図版②：Ⅲ区（三段目）／時期：－

- ・ 拝殿向かって西側に太鼓橋が2基確認されている。1基は倒木や雑草により埋没しているような状況である。
- ・ 写真の太鼓橋の内面に「南無阿弥陀仏」と刻まれる。



15: 庚申様 図版②：Ⅲ区（三段目）／時期：近世？

- ・ 太鼓橋北側の岩肌に龕が彫られ庚申様が祀られている。
- ・ 周辺は斜面地ということもあり、落石などが目立つ。



16: 本殿 図版②：Ⅲ区（三段目）／時期：－

- ・ 本殿は、弘化二年（1845）に人為的に彫り込んだ岩屋内に鎮座している。その規模は、間口4.9m×奥行3.1mである。



17: 岩盤加工跡 図版②：Ⅲ区／時期：－

- ・ 本殿手前の岩盤をL字に掘り込んだ痕跡が確認できる。小字「大堂」から考えると講堂が存在していた可能性も考えられる。



18: 磨崖宝塔① 図版②：Ⅲ区（三段目東側）／時期：鎌倉～南北朝？

- ・ 岩壁に3つの龕が穿たれている。右の龕に宝塔3基、中央の龕に宝塔3基、左側の龕に宝塔1基を浮彫りしている。
- ・ 3ヶ所の龕の上部には、大小9箇所の小洞（龕？）がみられる。

文化財の現況・詳細 (4)



19: 磨崖宝塔② 図版②: Ⅲ区/時期: 鎌倉~南北朝?

- ・磨崖宝塔①に比べ、風化が著しい。以前の調査では、4基と報告されているが、現在は3基しか確認することができない。



20: 磨崖曼荼羅種子 図版②: Ⅲ区(三段目)/時期: 鎌倉~南北朝

- ・本殿の東側の岩壁に径約1.3mの円を陰刻し、その中に大きく種子キリーク(弥陀)を線彫り(籠字)している。
- ・雄渾な書体から、鎌倉ないし南北朝時代の作と推定される。



21: 宝塔 図版②: Ⅲ区東側下段/時期: 近世か

- ・山王権現の南側の一段下に平坦面が存在しており、宝塔が1基存在している。
- ・聞き取り調査によって、近年の擁壁工事に伴い移動させたということがある。



22: 石祠 図版②: Ⅲ区東側/時期: 近世?

- ・平成25年度の現況確認調査において、石祠前に花瓶として使用されている青銅製経筒蓋1点と陶製経筒1点を確認した。



23: 経筒近景 図版②: Ⅲ区/時期: 12世紀後半

- ・出土地点の確認のため、聞き取り調査を行ったが、出土地点・時期・発見者等は不明な状況である。
- ・遺物の時期は12世紀後半代頃と考えられる。



24: 人為的平坦面 図版②参照/時期: -

- ・Ⅲ区から東側の観音堂へ続く道の左手側に人為的に造成された平坦面が存在する。六所権現の社が存在していた可能性が指摘されている。礎石など建物に関連する遺構は確認できない。

文化財の現況・詳細 (5)



25: IV, V区

図版②参照/時期: -

- ・身漕神社の西側にやや広めの平坦面が存在している。
- ・写真の左側下段がIV区、中央がV区である。旧無動寺の本堂が存在していた可能性が残るが現状では確認できない。以前は、小学校が立地していたということである。



26: 坊屋敷・ジレンボウ遠景

図版④参照/時期: -

- ・写真中央の橋を渡って右側が坊屋敷である。
- ・橋を渡り、左側に龍神社が鎮座し、その奥がジレンボウ跡地と推定される。



27: 坊屋敷周辺 石塔物

図版①参照/時期: 中世?

- ・坊屋敷において、無縫塔・五輪塔・一石五輪塔等の集積を確認した。
- ・無縫塔に銘などは確認できない。



28: ジレンボウ跡

図版①参照/時期: -

- ・ジレンボウ跡には、御堂が建てられている。聞き取り調査によると、御堂の東側に坊跡があった可能性があるということだった。関連する中世石造物などは確認できなかった。



29: 御堂内 仏像

図版①参照/時期: -

- ・石像仏が5 軀程安置されている。近世頃の作と思われる。



30: 観音堂 (旧)

図版②参照/時期: 昭和5年

- ・昭和5年に、当時の無動寺住職などによって建立されたということである。現在は老朽化が進み、堂内に石造仏は安置されておらず、後述する新しい観音堂に移されている。

文化財の現況・詳細 (6)



31:不動明王像・千手観音像 図版②参照/時期:近世

- ・旧観音堂下の岩壁に造られた龕?に安置されている。平成5年度の調査によれば、千手観音2軀が旧観音堂に存在していると報告されており、その内の一体の可能性が高い。不動明王については、どのような経緯で安置されたのか不明である。



32:不動屋敷全景 図版②参照/時期:-

- ・旧観音堂の南東側が不動屋敷と呼ばれており、板碑型墓碑などの石造物が確認できる。
- ・不動様を中の坊から現無動寺へ移動する際に、ここで棒が折れ不動様がどうしても動こうとしなかったため、ここに祀ったということである。



33:観音堂(新) 図版②参照/時期:平成21年頃

- ・旧観音堂の老朽化に伴い、近隣住民の方々により新しく建立された観音堂である。
- ・写真左上に確認できるのが、旧観音堂である。



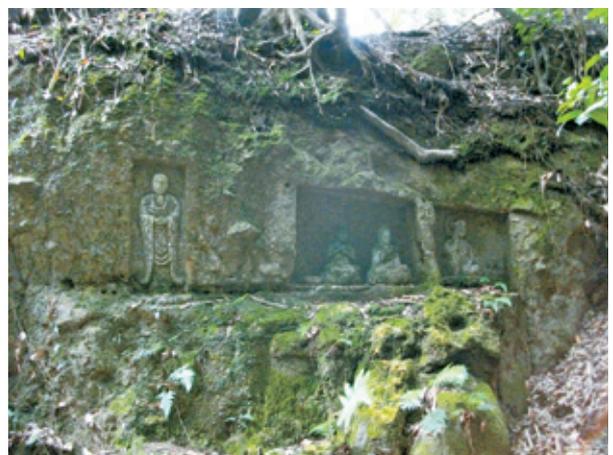
34:観音堂内石造仏 新観音堂内/時期:近世

- ・旧観音堂より移動した千手観音像1軀・弘法大師像2軀・十一面観音像1軀・菩薩像1軀が安置されている。



35:五輪塔群 図版②参照/時期:-

- ・不動屋敷の北西約20m程に五輪塔群が存在している。
- ・一石五輪塔も含め7基が確認できる。



36:中の坊磨崖仏群 図版①参照/時期:室町末期~江戸初期頃

- ・3つの龕が穿たれる。右の龕に弥勒菩薩半跏思惟像(像高48.5cm)、中央龕の右に大日如来坐像(像高39cm)、左に阿弥陀如来坐像(像高39cm)が、左の龕に地藏菩薩立像(像高81cm)が存在している。
- ・市指定史跡に指定されている。

文化財の現況・詳細 (7)



37: 中の坊磨崖板碑 図版①参照/時期: 室町末期～江戸初期頃

- ・中の坊磨崖仏と向い合うように磨崖板碑が6基彫られている。
- ・墨書銘があると報告されているが、確認できない。
- ・磨崖仏と同様に室町末期～江戸初期の作と考えられる。



38: 中の坊 五輪塔群 図版①参照/時期: 室町時代

- ・一石五輪塔及び五輪塔、その他の各石塔部材が位置している。



39: 巖乃院明王堂 図版①参照/時期: -

- ・御堂は自然の岩壁を覆うような形で建てられている。
- ・御堂の周辺には、近年の擁壁工事に伴い移動させた石造物などが安置されている。



40: 不動明王梵字 図版①参照/時期: -

- ・室内には、多数の石造物が安置されている。
- ・岩肌には、不動明王の梵字である「カーン・マーン」が薬研彫りされている。



41: 福真磨崖仏 図版①参照/時期: 南北朝期

- ・右より不動明王立像・六観音座坐像・金剛界四仏坐像・金剛界大日如来坐像・六地藏坐像・多聞天立像が彫られる。
- ・覆屋は石造で、安政四年に安藤國恒らによって造られている。



42: 四王岩屋 図版①参照/時期: -

- ・『建武注文』に「四王岩屋、本尊四天王」と記される。
- ・福真磨崖仏の背後に位置する

文化財の現況・詳細 (8)



43: 『限北大石』

図版①参照／時期：－

- ・ 道路沿いの巨石が旧無動寺の四至の北限と考えられる。
- ・ 建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、「限北大石」と記載されており、これに該当するものと推察される。



44: 仏性坊 上段板碑型墓碑

図版①参照／時期：近世？

- ・ 仏性坊の上段において、板碑型墓碑などが、倒木や枯葉に埋没している形で確認された。
- ・ 同行して頂いた鷺海年春氏（昭和5年生まれ）によると、丸型の墓石を見たとのことであり、無縫塔が存在している可能性は十分に考えられる。



45: 善蔵坊跡推定地 五輪塔

図版①参照／時期：－

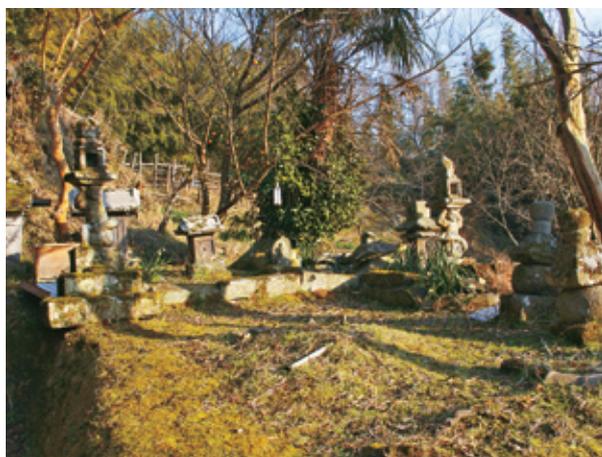
- ・ 社跡地において、一石五輪塔及び宝塔の部材を確認した。



46: 仏仙坊・法泉坊推定地

図版①参照／時期：近世

- ・ 坊跡には、現在御堂が建てられ近世段階の五輪塔や石灯籠が安置されている。



47: 仏仙坊・法泉坊推定地

図版①参照／時期：近世

- ・ 石祠及び五輪塔を確認した。石祠には文化八年（1811）銘が残る。
- ・ 写真は、No46の御堂右手側にある石造物群である。



48: 寶泉坊

図版①参照／時期：－

- ・ 周辺を踏査したが、石造物は確認できなかった。

寺院名	本 松 房		寺院番号	㊸
所在地	大字上黒土			
居住状態	無住	各種文化財 員 数	種 別	個 数
指定文化財			木 造 建 築	
			礎 石 跡 等	
			石 造 物	4
			仏 像	
			美 術 品	
			古 文 書	
		そ の 他		
特筆すべき 文化財	・ 宝塔 (写真No2)	・ 五輪塔群 (写真No3)		
	・ 本松坊近世墓地群 (写真No8)	・ 手水鉢 (写真No10)		
寺院 管理状況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お寺の管理は、地域住民によって行われており御堂もきれいに整備されている。仏像なども整然と安置されており、現在は「お接待」の会場として使用されている ・ 御堂の西側に隣接する墓地については、近隣住民の方も除草程度でありあまり管理を行っていないということであり、やや荒廃している印象をうける。 ・ 聞き取り調査により、現本松房の北東側の畑に位置する手水鉢周辺が、以前の坊跡であったという伝承が残されている。これは黒土在住の元真玉郷土研究会会長である佐當角雄氏への聞き取り調査においても、同様の内容が研究会で報告されたということである。また、畑で確認された手水鉢は風化が著しく、早急な対策が必要と思われる。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本松房とされる資料として、長承四年（1135）の『夷住僧行源解状案』に「黒土岩屋」の記載がある。 ・ 安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』に「中山分-黒土石屋、本尊馬頭観音、・・・六所権現於御寶前、二季祭 五節供等、今始御祈祷・・・」とある。また、嘉元二年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』には「黒土」とある。 ・ 建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』には、「中山-黒土 限東美尾 限西大岩屋美尾 限南小岩屋境 限北大河内夷境」などの記載がみられる。 ・ 『太宰管内志』に収録された、室町時代の作といわれる『六郷山定額院主目録』に「小岩屋山無動寺、院主本松院・・・」、後世の作とされる仁安三年（1168）の『六郷二十八山本寺目録』に「正宗（文）中山十箇所 黒土山本松房」、また、『豊後國志』に「多門寺 在真玉莊黒土村、號黒土山」などの記録が残されている。 			

寺院現況及び変更点

安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』に記載されている「黒土岩屋」が本松房に相当するものと考えられている。この目録において「石屋・岩屋」の名称が使用される寺院については、すべて岩屋や岩陰を伴っているが、現本松房周辺には認められない。よって、その位置については、現無動寺が本来、下流である身濯神社に位置していた可能性が指摘されており、それによって空白となる二つの岩屋を背後に有する現無動寺の位置が、かつての黒土石屋（黒土山本松房）であった可能性が高いとされている。

＜Ⅰ区（御堂手前）＞（図版②：境内実測図参照）

- ・御堂へと上がる石段（写真No.1）の左側に、宝塔と思われる石造物が1基存在している。（写真No.2）また、その反対側の石垣上において銘文は正確に確認できなかったが、記念碑と思われる石造物を1基確認した。同時に、石段を登った境内入口付近で手水鉢1基、五輪塔群を確認した。（写真No.3）

＜Ⅱ区（境内西側平坦面）＞（図版②：境内実測図参照）

- ・Ⅲ区の境内から1段下がった位置である。現在、倉庫が1棟あり、その西側には水路が流れている。

＜Ⅲ区（御堂周辺）＞（図版②：境内実測図参照）

- ・現御堂（写真No.4）が立地しており、堂内には木造阿弥陀如来坐像や石造の弘法大師像や不動明王像、その他千手観音像など計10躯の仏像が安置されている。（写真No.5.6）この御堂の北側と西側において、旧御堂の基壇跡と思われる石列を確認した。（写真No.7）また、御堂向って左側には、寄進碑が1基建立されている。

＜Ⅳ区（本松房墓地）＞（図版②③：境内実測図・拡大図参照）

- ・墓碑及び石造物が集中している。（写真No.8）確認できるだけでも、10基以上の墓碑、石造仏と無縫塔1基が存在している。墓碑は半分に折れているものや、台座しか現存していないもの、また墓碑のみが倒壊しているものなど様々である。墓碑銘が確認できたものは、以下のとおりである。

墓碑①正面「権律師円空大徳」 右側面「文化八未年（1811）」 左側面「閏二月初四日」
墓碑②正面「法印豪□墓 寛政七卯年（1795） 五月□十四日」
墓碑③正面「大僧都大阿闍梨□□□□大和尚位」 右側面「□文三戊午天（1738）」 左側面「十月二十四日」
墓碑④正面「□□院権少僧都豪林」 右側面「寛政□□天（1789～1801）」 左側面「九月初日」
墓碑⑤正面「権律師豪量法眼覚位」 右側面「宝暦二□□季（1752）」 左側面「正月初四日」

この墓地群の西南側の落ち際に、南北約2.5m×東西約1.5m程の巨石があり、その上に石祠が1基置かれている。時期に関しては不明である。（写真No.9）

＜その他＞（図版①：詳細位置図参照）

- ・以前の報告書に記載されている本松房の手水鉢を、御堂から北東側に100m程移動した畑の中で確認した。やや劣化している印象を受けるものの、大きな変更点は見られなかった。（写真No.10）また、現在ミカン畑になっているこの周辺一帯が本松房跡地として伝えられている。

＜身濯神社について＞（図版①：詳細位置図参照）

- ・本松房の御堂より200m程上流に身濯神社が立地している。（写真No.11）現在手水鉢があるミカン畑周辺が「古宮」と呼ばれており、本来はこの位置に祀られていたということである。
- ・身濯神社の左側に巨石が存在しており、宝篋印塔の残欠（写真No.12）などが確認できる。本松房に伴う六所権現社であったものと考えられる。

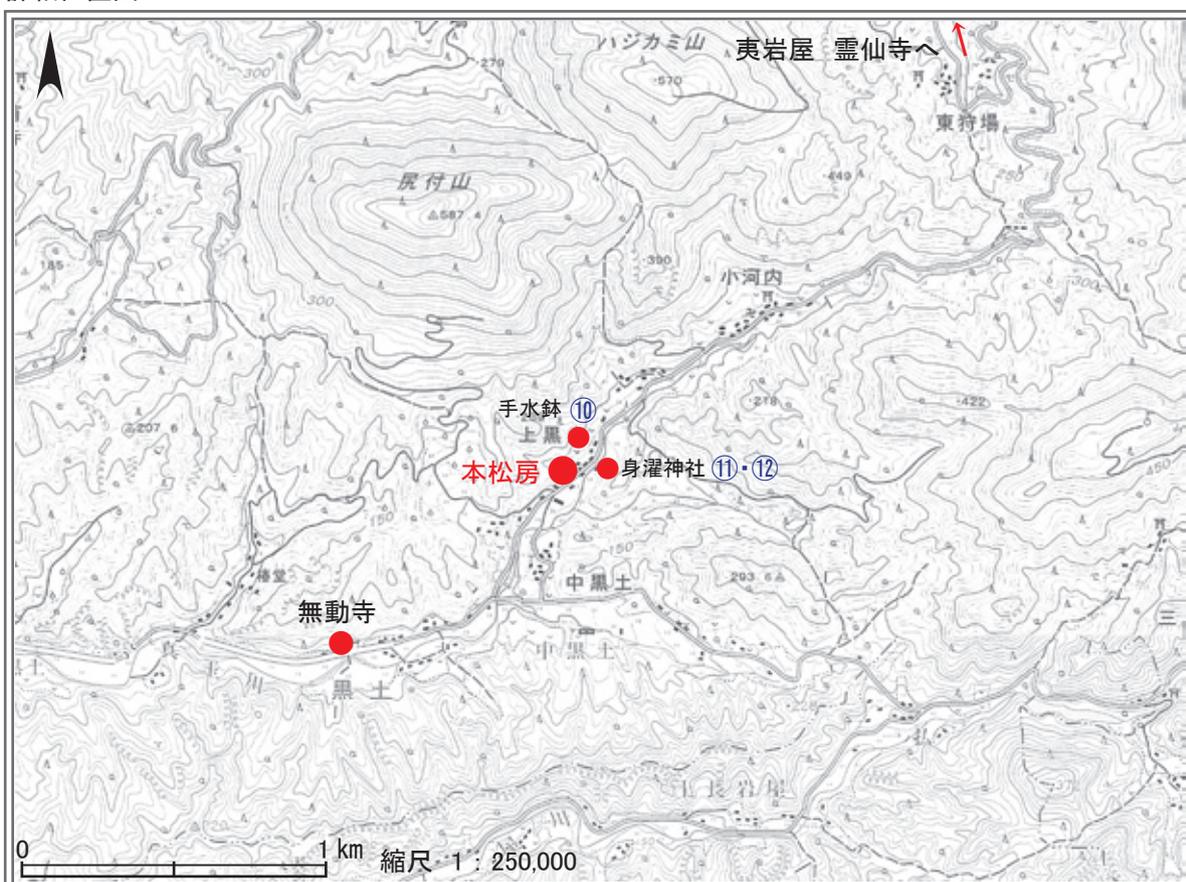
＜＜主要参考文献＞＞

- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 1994
- ・大分県文化財調査報告書 第37輯『六郷満山関係文化財総合調査概要－豊後高田市・真玉町・香々地町の部－』 大分県教育委員会 1976

図版① 本松房 位置図
市域位置図



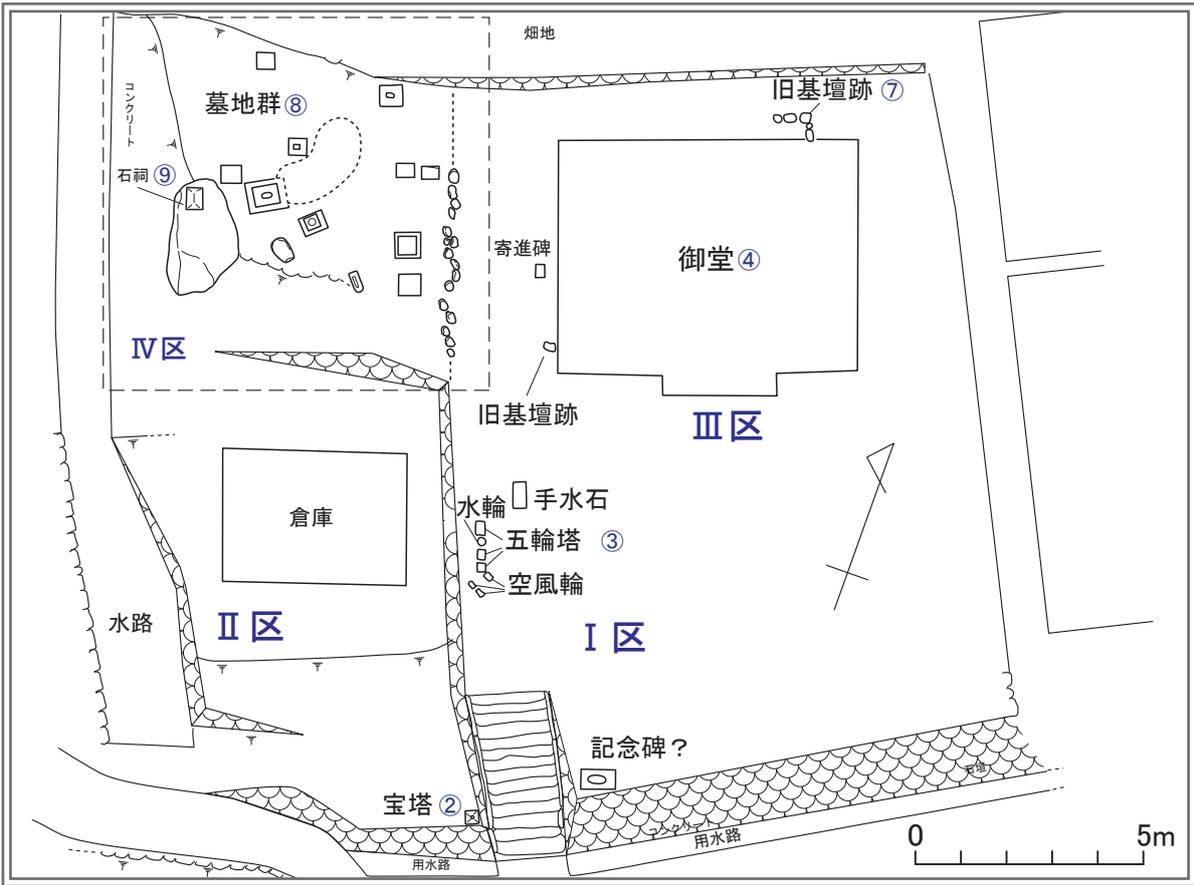
詳細位置図



※⑩～⑫の番号は、写真No.とリンク

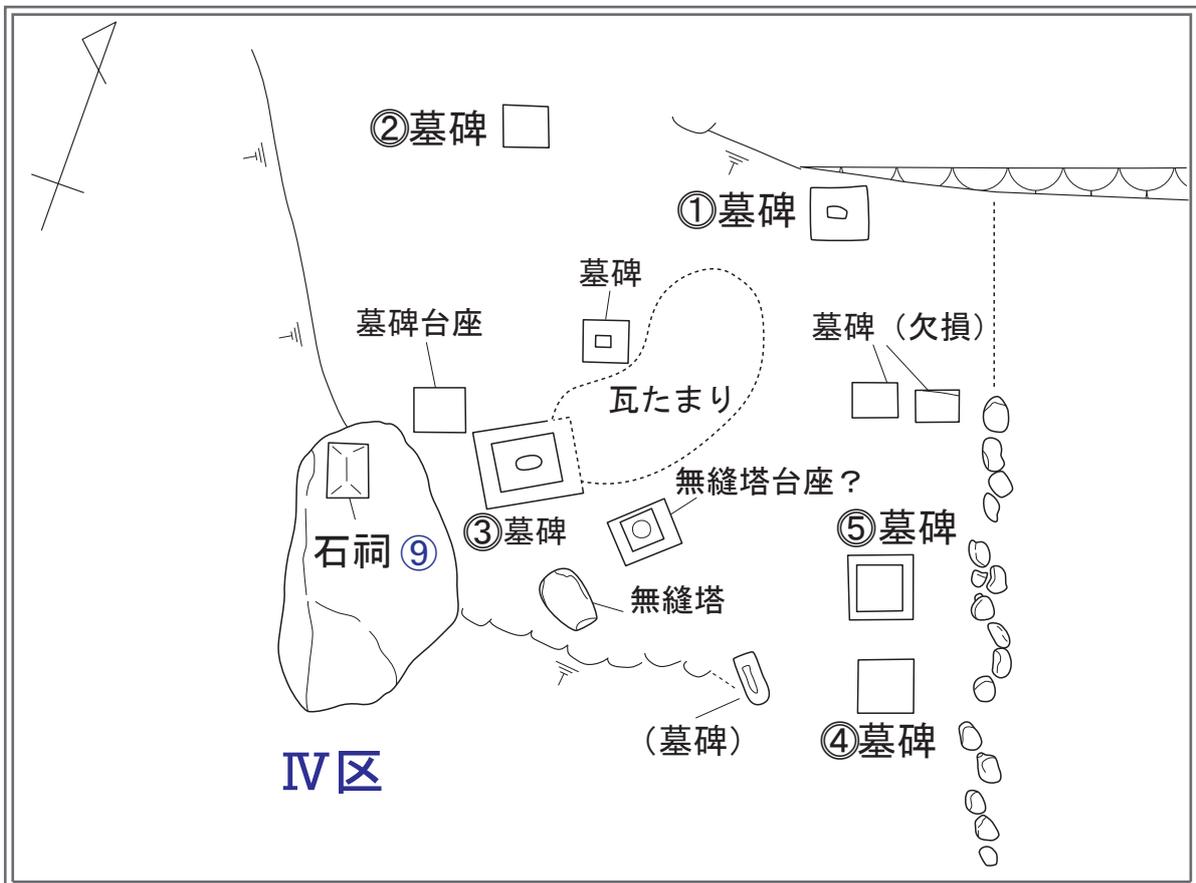
真玉地区

図版② 本松房境内実測図



※②～⑨の番号は、写真Noとリンク（⑤、⑥については御堂内に安置されている）

図版③ IV区拡大図



※◎の番号については「寺院現況及び変更点」を参照

文化財の現況・詳細（1）



1：本松房 図版①～②参照：Ⅰ区／時期：近世か？

- ・道路に面した形で、境内へ続く石段が形成されている。左手に宝塔や石段を登った地点に五輪塔部材などが集積されている。



2：宝塔 図版②参照：Ⅰ区／時期：－

- ・境内へ続く石段の左手に宝塔が存在している。
- ・時期などについては不明である。



3：手水鉢・五輪塔群 図版②参照：Ⅰ区／時期：近世か

- ・時期などは不明であるが、境内の入口付近に手水鉢が1基と五輪塔3基と各五輪塔部材が集積されている。



4：御堂 図版②参照：Ⅲ区／時期：現代

- ・近年新しく建立されたということであり、堂内に仏像などが安置されている。
- ・現在、「お接待」の際に使用しているということである。
- ・北側と西側において、旧基壇跡が確認できる。



5：堂内仏像① Ⅲ区堂内／時期：－

- ・御堂内の中心に馬頭観音と阿弥陀如来像が安置されている。



6：堂内仏像② Ⅲ区堂内／時期：近世か？

- ・石造の弘法大師像や不動明王像、一番奥には千手観音像などが安置されている。

文化財の現況・詳細 (2)



7:旧基壇跡 (北側) 図版②参照:Ⅲ区北側/時期:-

- ・現在の御堂の北側において、以前の御堂の基壇が部分的に確認できる。



8:本松房墓地 図版②、③参照:Ⅳ区/時期:近世

- ・多数の墓碑が存在しているが、倒壊や欠損しているものが多数みられる。
- ・元文三年(1738)以降の墓地群と推察される。



9:石祠 図版②、③参照:Ⅳ区/時期:近世

- ・墓地群の西側端部に巨石が存在しており、その頂部に石祠が立地している。銘などはみられないが、近世と考えられる。



10:手水鉢 図版①参照/時期:-

- ・御堂より北東方向に100m程移動した地点に手水鉢が横倒しとなった形で残されている。石風呂の可能性も指摘されている。
- ・この手水鉢周辺に本松房が存在していたとされる。



11:身濯神社 図版①参照/時期:-

- ・真玉川の傍に立地しており、以前は、手水鉢がある付近に立地していたということである。境内には、江戸後期～明治にかけての石灯笼や狛犬が存在している。



12:宝篋印塔残欠 図版①参照/時期:-

- ・身濯神社の拝殿左手側に巨石があり、その南側において宝篋印塔の残欠が確認できる。時期などは欠損が著しく、確認できない。

寺院名	弥勒寺		寺院番号	㊸
所在地	字下城前			
居住状態	無住	各種文化財 員数	種別	個数
指定文化財	・宝篋印塔（市有形） ・弥勒菩薩像（市有形）		木造建築	
			礎石跡等	
			石造物	3
			仏像	4
			美術品	1
			古文書	1
		その他	1	
特筆すべき 文化財	・一石五輪塔（写真No4）	・観音菩薩像（写真No7）		
	・毘沙門天像（写真No7）	・不動明王像（写真No8）		
	・銘文入り隅石（写真No11.12）	・鬼会道具一式（写真No20～22）		
	・経典（写真No23）	・涅槃図		
寺院 管理状況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在は、近隣住民の方により管理されており、60年程前までは地域でお祭りを行っていたということである。その他、年に2回應曆寺の住職によってお経を上げてもらっているということである。 ・御堂内には、本尊である弥勒菩薩を中心に、不動明王・毘沙門天・観音菩薩があり、木製の格子で区切られる形で安置されている。近隣住民の方の話によると、少雨の時には、不動明王像を川付近まで移動させ、簡易的な堂を建造し、雨乞いをしていたということである。 ・鬼会で使用される鈴鬼や荒鬼の面・仏具・経巻等が一式揃って残されている。これらは木製の箱に納められ大事に保管されている。その他、時期は不明であるが、涅槃図なども堂内に保管されている。 ・図版㉔に記載しているB区周辺については、傾斜地に墓碑などが安置されており、崩落の恐れも考えられる。写真No13で報告している旧参道と考えられる石段については風化が著しい。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・近世の作といわれる仁安三年銘の『六郷二十八山本寺目録』に「唐溪山弥勒寺」とその名を残すのみで、その他の中世の文献には記載がみられない。 ・18世紀初頭には、弥勒寺の末坊として谷之坊以下5坊を有していたとされるが、18世紀後半になると「應曆寺末寺 無住」と記されており、衰退したものと考えられる。 ・弥勒寺では、明治37年まで鬼会が行われていた。鬼会の経巻と鬼面（4面）が御堂内に保管されている。（今回の調査で確認できたのは3面） 			

寺院現況及び変更点

<A区>(図版②: 弥勒寺実測図参照)

- ・弥勒寺(写真No.1)周辺は、平成11年前後における西弘川の河川改修工事に伴い改変を受けており、現在の新しい参道は、境内南側下段を東西に延びている。参道から境内(A区)へ登ると文久三年(1863)の銘が確認できる鳥居が立地している。(写真No.2)この鳥居の西側に無縫塔と手水石が1基ずつ存在している。(写真No.3)
- ・河川改修工事以前には、現在の弥勒寺駐車場付近に西弘川の小さな淵が立地しており、鬼会の際には禊が行われていたということである。この淵は「アカトリ水」と呼ばれていたそうである。
- ・A区西側には、五輪塔11基・一石五輪塔1基が東西方向に並べられている。一石五輪塔は、梵字が刻まれており、現在でも十分に確認することができる。(写真No.4)
- ・A区東側には、御堂(写真No.5)と倉庫が並んで立地しており、以前の実測図面と比較しても大きな変更点はみられない。堂内には、市指定有形文化財に指定されている弥勒菩薩坐像(写真No.6)を本尊として、右手側に毘沙門天と観音菩薩(写真No.7)、左手側に不動明王像が安置されている。(写真No.8)
- ・倉庫南側の石造物については、以前の図面では4基確認することができるが、現況では3基しか確認できなかった。消失した理由は不明である。また、石造物の時期については、宝暦十一年(1761)や天明二年(1782)などの銘が確認できる。(写真No.9)
- ・倉庫東側には、やや広い平坦面が存在している。聞き取り調査により、以前はこの場所で鬼会が行われていたということである。(写真No.10)

<B区>(図版②: 弥勒寺実測図参照)

- ・A区からB区へ登る石段両脇に、銘文入りの石垣(隅石)が2箇所存在している。(図面:a、b地点)(写真No.11.12)その内、b地点の銘文は現在でも十分に確認できる。しかし、a地点の隅石の銘文に関しては、劣化が著しく、現状では銘文とその扇状の枠の痕跡を確認できる程度である。
- ・石段西側の再建碑の裏側に旧参道の石段が残されている。(写真No.13)
- ・B区周辺には、石灯籠(図面:c)・一石五輪塔・祠・石造仏等が集中しているが、その北側に岩屋が存在している。この岩屋内に祠とともに木製神像(三社権現)が祀られている。岩屋のある上面岩壁に定期的に岩壁を掘り込んでいる箇所が確認できるため、以前は岩屋を覆う堂が存在していた可能性が考えられる。聞き取り調査においても、以前は堂が存在していたという伝承が確認できた。(写真No.14)また、B区西側には、市指定有形文化財である宝篋印塔(図面:d)や石塔なども立地している。(写真No.15)
- ・B区西側にあたる図面e地点には、多数の墓碑や石造神像などがあり、宝永六年(1709)や享和三年(1803)の銘が確認できる墓碑が立地している。(写真No.16.17)
- ・聞き取り調査によると、B区が「奥の院」と呼ばれており、後述するI区が「三社権現」と呼ばれていたということである。

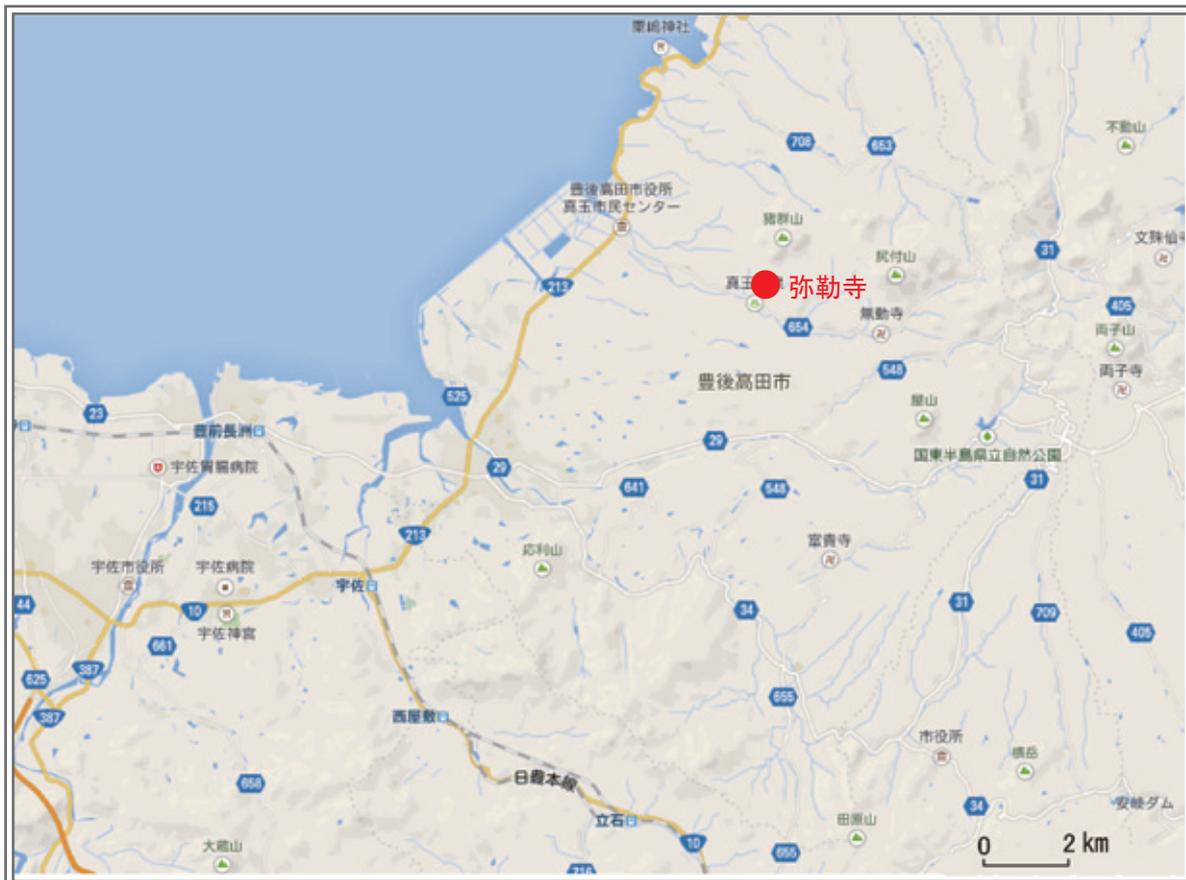
<I・II区>(図版②: 弥勒寺実測図参照)

- ・I区において、岩屋が存在しており、以前は三社権現と呼ばれていたということである。岩屋内には、石祠や天保十一年(1840)銘の石灯籠などが見られる。また、岩面を掘りこんだ龕の中に石造仏を3躯安置している。(写真No.18)(風化の具合などから近年安置されたものか)
- ・II区では、建物跡と思われる礎石跡を確認し図面上に追加した。この礎石については、A区に存在していた御堂が老朽化したため、明治頃に新しくII区に御堂を新設した際の礎石跡ということである。その後、現在の位置に再度御堂を建立し、仏像も移動させたということである。(写真No.19)

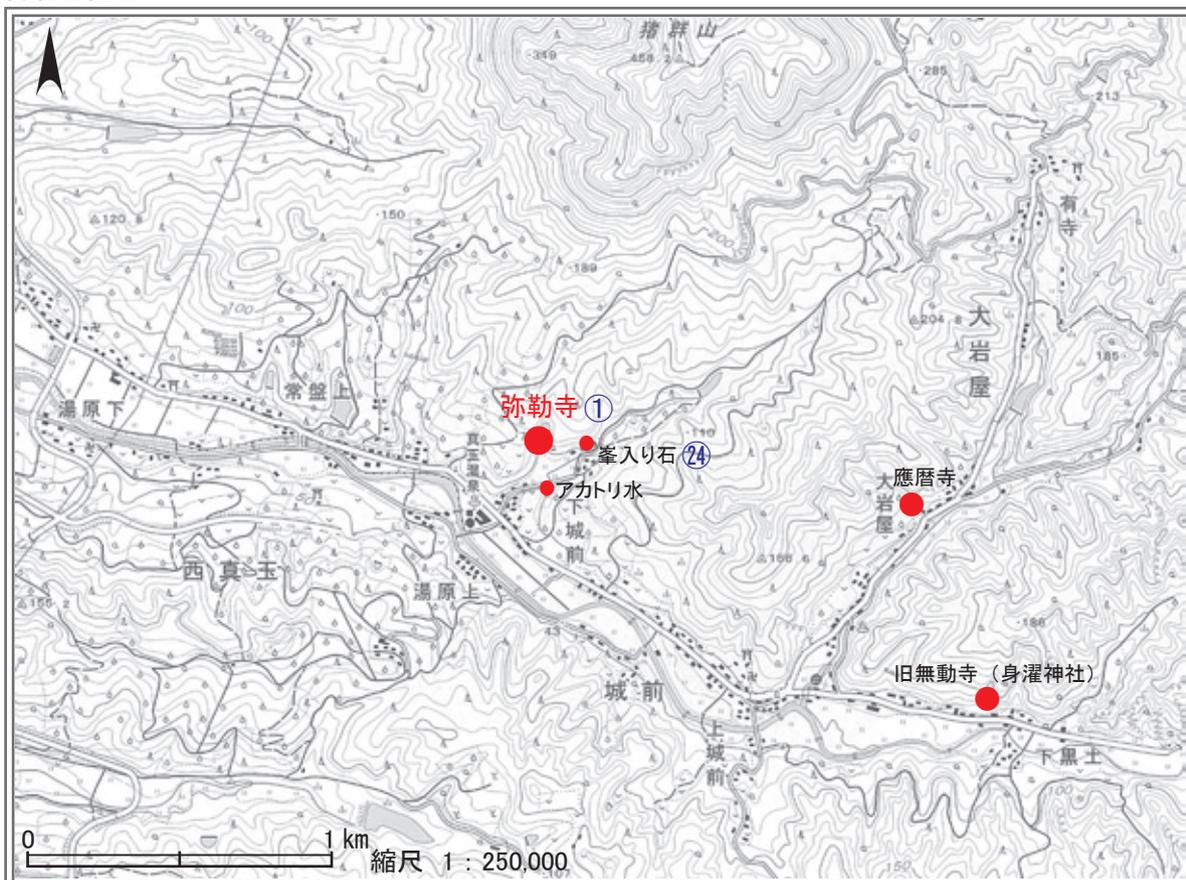
《主要参考文献》

- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅷ』大分県立歴史博物館調査報告書第4集 大分県立歴史博物館 2000
- ・『六郷満山関係文化財総合調査概要―豊後高田市・真玉町・香々地町の部―』大分県文化財調査報告書 第37輯 大分県教育委員会 1976

図版① 弥勒寺 位置図
市域位置図



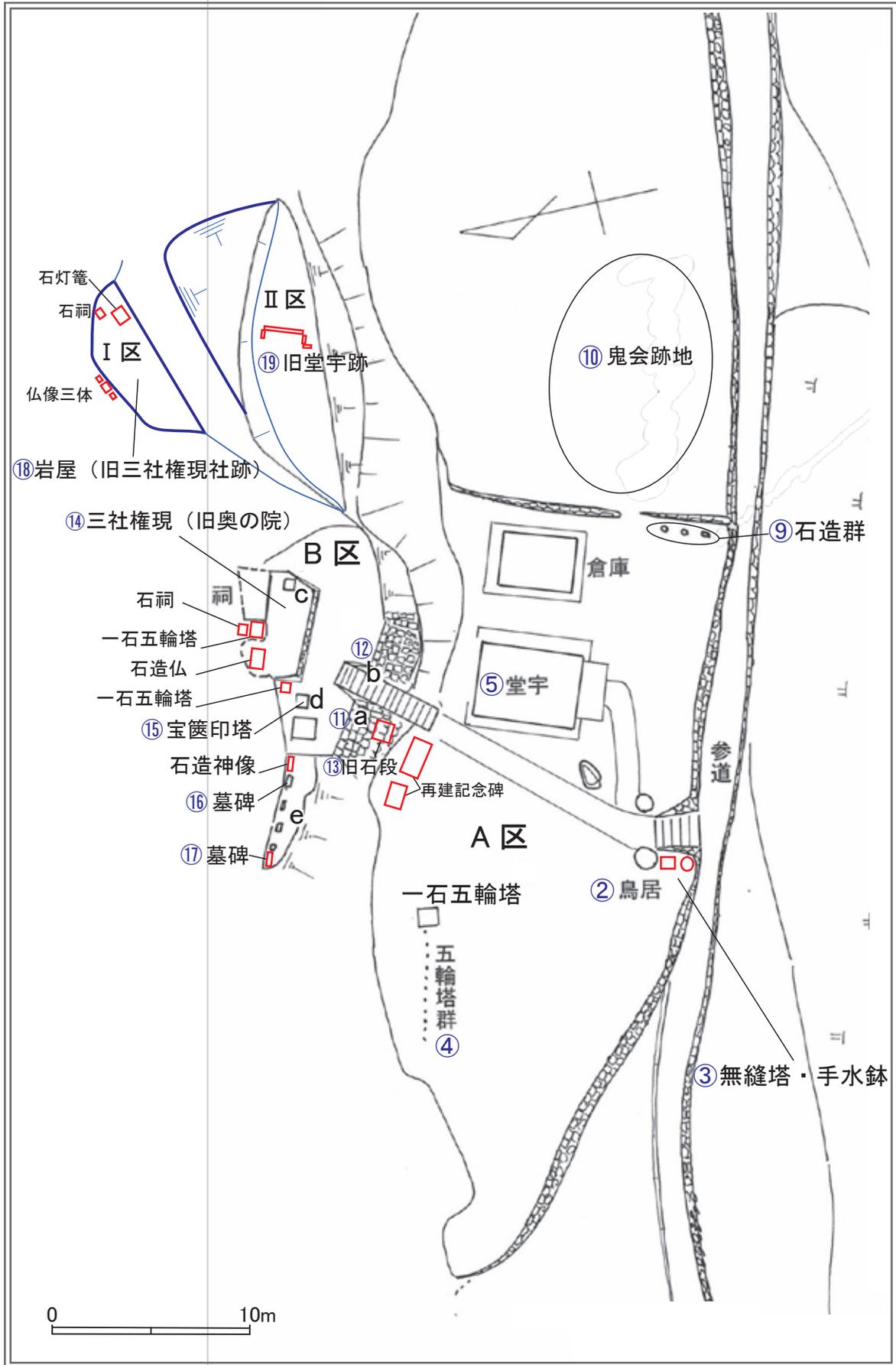
詳細位置図



※番号は写真No.とリンク

真玉地区

図版② 弥勒寺実測図



※番号は写真No.とリンク ※青ライン部分及び赤塗部分の縮尺は任意

文化財の現況・詳細（1）



1：弥勒寺全景

図版①参照／時期：－

- ・真玉川に流れ込む西払川の右岸、猪群山から南に派生する低丘陵の裾部に立地している。



2：鳥居

図版②参照：A区／時期：文久3年

- ・三社大権現の鳥居であり、文久三年（1863）の銘が確認できる。



3：手水鉢・無縫塔

図版②：A区／時期：－

- ・鳥居南側に手水鉢と無縫塔が1基存在している。風化が著しく、銘などは確認できない。



4：五輪塔群・一石五輪塔

図版②参照：A区／時期：－

- ・A区西側の平坦面上に東西方向に一列に並ぶ。この五輪塔については、近隣から集められたものということである。一石五輪塔は梵字が刻まれており、雨除けの小堂が設けられている。



5：御堂

図版②参照：A区／時期：昭和50年

- ・A区の参道東側に昭和五十年に再建された御堂が立地している。
- ・堂内には中央に弥勒菩薩、右に毘沙門天と観音菩薩、左手に不動明王が安置されている。
- ・柱に見える喚鐘は享保四年（1719）の作である。



6：弥勒菩薩坐像

堂内／時期：江戸時代

- ・総高1.30m、像高0.85m、桧材の寄木造りの坐像である。

文化財の現況・詳細 (2)



7: 毘沙門天立像・観音菩薩立像 堂内/時期: 江戸時代

- ・ 毘沙門天像は、総高1.41m、像高0.95mの立像である。一木彫成・彫眼・彩色の像形で、右手の肘を屈し戟を持ち、左手の掌を開いて宝塔を載せている。江戸時代の作とされる。
- ・ 観音菩薩像は、樟材の一木造で、江戸時代後期の作である



8: 不動明王立像 堂内/時期: 江戸時代

- ・ 総高1.14m、像高1.01mの立像である。一木彫成・彫眼で彩色が施してあったと考えられる。
- ・ 渴水時に近くの川まで担ぎ、雨乞いを行うと必ず雨が降ったということである。



9: 本堂南側石造物 図版②参照: A区/時期: 近世

- ・ 以前の調査実測図によると、4基の石造物が存在したようであるが、現在は3基のみ確認できる。
- ・ 銘が確認できるもので、宝暦十一年(1761)や天明二年(1782)が存在している。



10: 鬼会跡地 A区東側平坦面/時期: 明治37年まで

- ・ A区東側に平坦面が残されており、以前はこの場所で鬼会を行っていたということである。講堂が存在していた可能性もあるが、礎石などはみられない。



11: 銘文入り隅石 (a) B区手前石垣/時期: 近世?

- ・ B区へ登る参道の左右に銘文入りの隅石が残されている。
- ・ 現状では、扇形の杵の痕跡のみが確認できる程度である。



12: 銘文入り隅石 (b) B区手前石垣/時期: 近世?

- ・ B区へ登る石段右側の隅石に扇状の杵と銘文が残されている。
- ・ 「奉寄進 桂石 土谷伊兵衛 宮谷弥十良」と刻まれている。

文化財の現況・詳細 (3)



13: 旧石段 参道石段西側／時期：近世？

- ・聞き取り調査により現在の石段が形成される前の階段跡を確認した。
- ・写真赤ライン部分に石段の痕跡が確認できる。



14: 岩屋 図版②参照：B区／時期：－

- ・現在は三社権現が祀られているが、以前はI区の岩屋に祀られており、この場所は奥の院と呼ばれていたという。
- ・岩屋上面の岩壁には、ホゾ穴が残される。以前は建物が存在していたという。
- ・周辺には享保十三年(1728)銘の石灯笼や一石五輪塔などがみられる。



15: 宝篋印塔 図版②参照：B区／時期：室町期

- ・入念に作られた形の整った塔であり、室町期の作と言われる。
 - ・市指定有形文化財に指定されている。
- (「六郷満山関係文化財総合調査概要」大分県教育委員会 1976)



16: 宝永六年銘墓碑 図版②参照：e地点／時期：宝永6年

- ・e地点において宝永六年(1709)銘の墓碑が存在している。



17: 享和三年銘墓碑 図版②：e地点／時期：享和3年

- ・墓碑3基が並立している。
- ・中央の墓碑には「享和三年(1803) 浄源院順清大徳」の銘が確認できる。



18: I区岩屋 図版②参照：I区／時期：近世？

- ・B区西側には、岩屋が存在しており、以前は三社権現社と呼ばれていたようである。
- ・現在、石祠や天保十一年(1840)銘の石灯笼が位置する。
- ・龕内には弘法大師像等の石造仏が安置されている。

文化財の現況・詳細 (4)



19: II区礎石跡 図版②参照：II区／時期：明治

- ・ I区南側に礎石が残されている。聞き取り調査によると、明治頃に御堂をA区より建て替えたという。
- ・ 再び現在の位置に御堂を戻した時期は不明である。



20: 鬼会佛具 堂内／時期：近世

- ・ 鬼会の道具一式が木箱に納め残されている。
- ・ 写真の右側より鈴鬼面、中央に経巻、左側に佛具である。



21: 荒鬼面① 堂内／時期：天保2年

- ・ 裏面に「天保二年（1831）夷邑法橋國光作」の墨書が確認できる。



22: 荒鬼面② 堂内／時期：文化11年

- ・ 裏面に「文化十一年（1814）夷邑板井國光作」と墨書が残されている。



23: 経巻 堂内／時期：文化2年

- ・ 文化二年（1805）の墨書がみられる木箱に「妙法蓮華経巻」が収められている。



24: 峯入り（大石） 民家内／時期：-

- ・ 弥勒寺東側の民家の脇に、峯入りの際に使用された大石が残されている。
- ・ 峯入りの際に大石の上から飛び降りていたということである。